真・箱庭転生 FINAL

VANILA

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は己の前に立ち塞がる者を切り捨て、前へ進んでいった。

敵だろうと、味方だろうと、構わず切り捨てた。

募る罪悪感に信念を揺さぶられながら、誰かからの敵意に心を削られながら、ひたすら自身の〝中庸〟を信じて進んだ。

結果として彼は記憶を失い、東京を追い出される事になった。

すると、自身の名前すら覚えていない彼の元に、一通の手紙が届く。

そして彼、ナナシは、箱庭と言われる世界に呼ばれたのだった。

今、箱庭で一人の神殺しの少年の物語が、動き始める。

真・箱庭転生　ＦＩＮＡＬ

※注意　　この作品は作者が初めて書く、所謂処女作と言われる作品の　　為、文が荒く読み辛いかもしれません。

どうか、暖かい目でこの作品でのナナシ君の活躍を見ていただければと思います。

目次

プロローグ ―― 1
第一話「ＮＡＭＥ　ＬＥＳＳ」 ―― 7
第二話「仲魔と悪魔」 ―― 22
第三話「乱射魔、跡を濁す」 ―― 33
第四話「元魔王」 ―― 63

プロローグ

少年は神を殺しうる力をもって、並ぶことのない唯一なる栄光の主に向かって、渾身の一撃を繰り出した。その一撃を受けた者は、余りの苦痛と恥辱に呻き声を上げる。その一方で、その一撃を放った少年は呻き声を上げる者とは対象的に、まだ余力を残しているようで、息を上げてすらいない。

目の前の存在の神性を全て消し去らんと、少年はその刃に全身全霊の力を注ぐ。この一撃で状況が動く、そう意気込んで気力を高める。

宇宙の星々の様に暗闇に輝いていた□□□□の神性はもう面影を残しておらず、ただそこには暗闇にそびえる□□□□と神殺しの青年、禍々しさと神々しさを併せ持つ悪魔、そして少年が立っているだけだった。

終わらせる。少年は一気に□□□□に畳み掛けようとする。

だが

「!?」

少年は気付く。自分の足が動かない事に。そしてその原因が、自分の足に絡まる手の様な何かだという事に。

「主殿!?」

青年が驚く。無理もない。自分の慕う主はいま、手の様な何かに縛られると同時に、その身体が暗闇の中に飲み込まれようとしているのだから。

束縛された少年はその手の様な何かから逃れようと、もがく。青年も自分の主が暗闇にのまれないよう、少年の身体を引っ張る。だがどんな原理なのか、身体に力が入らず束縛を解くことができないうえに、青年がどれだけ引っ張っても身体はズブズブと暗闇の中に入っていく。そしてそうこうしている内に、身体の半分が闇にのまれてしまった。

すると、スマホを依代としていた髑髏の様な姿をした悪魔が、慌てた様子で少年の前に現れる。

「チィッ！奴め、□□□□に身も心も売ったか！マズイぞ小僧ッこのままではお前と俺の繋がりが……！」
だが、その言葉は最後まで続くことはなかった。
その言葉が続く前に、少年の全身が暗闇にのみこまれたからだ。
「主殿ぉッ！」
完全にのみこまれた少年の姿を見て、青年は叫ぶ。しかし、その声が少年には届くことは、もうないだろう。少年は跡形もなく闇にのまれて消えた。
身体がのみこまれていくのを感じながら、少年は最期に己の無力さを悔いた。結局、□□□□を倒す事は叶わなかった。全ての神を殺すと言ってかつての仲間を手にかけておいて、自分は何を為す事もなく消えていこうとしている。
たまらなく悔しい。
たまらなく苦しい。
たまらなく悲しい。
だが、もうその感情すら無くなる。
もう、この世界の事など、自分には関係のない事になる。
そして少年は暗闇に沈む。

何を為すことなく
誰かを守る事も出来ず
少年はただ無様に
暗闇にのまれていったのだった。

◇

唐突に、自分が「改札口」と呼ばれる場所に立っている事に気が付いた。
辺りを見渡すと、荒んだ大地が、まず目に入った。不思議な事に、その大地は赤黒い砂嵐が吹きすさぶ空間を、浮遊しているように

見える。枯れた地面には線路が敷き詰められていて、それが遠い遠い急勾配の坂の先から、この「改札口」まで続いているようだ。
次に黒い人型の、靄の様《何か》が目に入る。その姿はまるで、輪郭がぼやけた人間のようで、少し気味が悪い。
人型のその《何か》は、坂の先からこの「改札口」を目指して、ゆっくりと動いて来る。とても沢山の《何か》が此処まで来るが、どれも自分の事などお構いなしに、自分の後方にある「改札口」を通って行く。
「行かない……と。進まない……と」
《何か》達はそれだけ言って、進んでいく。
通って行った《何か》は、更に向こう側にある光の柱に入って行く。ただ、幾ら待っても、柱に入って行く〝靄〟はいても、柱から出てくる《何か》は一向に現れなかった。
何故だかは知らない。だが、少年はその光景を恐ろしく思えた。何か、「後戻りが利かない」ような、「進まざるを得ない」ような、気分がするのだ。
どうしてこんな所に自分は居るのだろう。明らかに普通ではないその光景を目にし、少年は焦りながら自身の記憶を手繰り寄せる。
「…？」
少し焦って、ふと気づく。
自分がさっきまで何をしていたのか、自分が何をしようとしていたのか、全く思い出せない。おかしい。それどころか、昔の事や知人の顔とその名前、自分の誕生日や年齢、そして
〝自分の名前が思い出せない〟
いよいよ、自分が今とんでもない状況になっている事に気が付き、どうしようもなく取り乱す。少なくともこの状況は普通じゃ無いと分かる、全く関係無いが計算も出来る。ついでに、言葉も分かるし常識も持ち合わせている。
だが。
自分が何処に住んでいたのかわからない。計算や言葉を何

処で知ったか覚えてない。どんな世界での、どんな国での常識か分からない。
自分に関する記憶を、思い出せない。
慌てて自分の持ち物を漁る。鞄には回復薬しかなく、腰にはホルスターに入った銃と剣、左手のスマホホルダーに入っていたのは初期設定画面の名前欄にＮＡＭＥ　ＬＥＳＳとでているスマホだけ。どれも自分の身元がわかるような持ち物ではなかった。
「やぁ」
自分の記憶が無いという事実を知り焦燥感を感じていると、自分の背後から、急に穏やかな声が聞こえた。
驚いて振り向くと、さきほどまで誰も居なかった場所に、車椅子に座った男性が悠然とくつろぎながら、こちらをジッと見つめている。
「どうやら君は、この世界から拒否され、別の世界に跳ばされるようだ。無理もない、なんせ君は、あの□□□□□に喧嘩を売ったのだからね」
この男はなにを言っているのだろう?何故、自分は跳ばされなければいけないのだろう?そして、□□□□□に喧嘩を売ったとはどう言う事なのだろう。急に現れたこの男は何を自分に伝えようとしているのだろう。
様々な疑問が、少年の頭を駆け巡る。そんな少年の様子を車椅子の男は暫く眺めた後、やれやれと頭を振ると
「……そうだったね。君は記憶を抜き取られているんだった。これでは少し話し辛いな」
と、言った。
ザッと半身を引いて、何故か覚えていた、戦闘の構えをとる。その口振りは、どうして自分の記憶が無いのか、知っているものだった。もしかしたら、こいつが記憶喪失の原因かもしれない、と少年は警戒する。
しかし、その男は少年が構えるのを見て、「私は敵じゃないよ」とだけ言い、両手を上げるだけだった。

それだけの行動だったが、その男の言動に敵意は感じられず、少なくとも敵ではない事を確信し、少年は自身のとっていた構えを解く。

少年が構えを解くのを見て、男は満足そうに頷くと、言葉を続けた。

「君はこれから、前と同じ悪魔や神が蔓延る世界に足を踏み入れる事になる。そして、その世界で君は再び、悪魔と神の闘いに身を置くことになるだろう」

男の言葉に、反応する。再びという事は、自分は昔、闘っていたのだろうか。先程、無意識のうちに構えをとっていたり持ち物に銃や剣といった武器を持っていたあたり、自分は間違いなく戦闘経験が多かったように思える。しかし男は、

「いずれ分かるよ」

少年の考えてる事に被せる形で、そうとだけ言う。この事について話すつもりはないという事だろう。

「今回も、君は大きな選択を強いられるだろう。混沌か、秩序か、はたまた中庸か。どれを選ぶかは、君の自由だ。ただ」

男は一旦言葉を止め、頬杖をつく。

「……今回も〝君の中庸〟を選ぶなら、僕も少し、協力してあげよう」

……〝君の中庸〟とは、何なのだろう。普通の中庸とは違うのか、どうしてその選択に協力するのか、自分は何者でどうして記憶が無いのか、お前は何者で何故自分にこんな事を話すのか。

そう目の前の男に問いただそうすると、男は「もう、お別れのようだ」と少年に告げる。

すると、足元にヒラリ、と何か白い物が落ちたのが見えた。それを拾い上げてみると、白い手紙だという事が分かる。宛名の無い手紙を手に取って見ていると、男から「開けてみるといいよ」と声が掛かる。

少し不審がりながらも手紙を開ける。中に入っていた白い便箋には、こう書かれていた。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。己の才能を試す事を望むな

らば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを投げ捨て、我ら〝箱庭〟に来られたし』

その文を読み終わると、途端に身体が輝きだし、視界が白く塗りつぶされる。当然、目の前の男の姿は光で見えない。

「そういえば、〝記憶の無い君〟には、まだ自己紹介してなかったね」

相変わらず白い視界の中で、前から男の声がする。何とか白い視界から逃れようと必死でもがく少年とは裏腹に、落ち着いた穏やかな声で、男はこう言った。

「私の名前はスティーブン。……東京の救世主だった君が、箱庭で何を為すのか。僕はずっと見守っているよ」

男の、「スティーブン」の声を最後に聞いて、少年の意識は途切れた。その名前に強い既視感を覚えながら。

そして

少年が目を覚ますと、４０００メートル上空に、自身の身体が投げ出されているのに気づいた

第一話「ＮＡＭＥ　ＬＥＳＳ」

突然、空に放り出されたと思うと、次第に身体が垂直下向きに引っ張られる感覚に、少年は襲われる。何て事はない、単に重力に身体が引っ張られているだけだ。地球に住んでいる者ならば誰もが感じ、影響を受けている物理現象だ。

流石に、４０００メートル上空からこの現象を生身で感じるなんて事は、滅多にない事ではあるが。

「きゃッ！」

「わっ！」

「ッ！」

下から迫ってくる風を肌に感じながら、少年は周りを見る。そこには、自身と同じ様に現在進行形で自由落下している、二人の少女と一人の少年、一匹の猫の姿があった。

このままでは、自分を除く三人が仲良く全員輪廻の輪に乗ることになる。自分も死にはしないだろうが、足の骨を折ることになるだろう。何かパラシュート代わりになるような物がないか、少年は必死になって自身の鞄を漁る。だが、出てくるのは傷薬やディスポイズン、パトラストーンに道返玉などの回復薬ぐらいで、戦闘での危機を脱することができても、いま現在の危機を脱することはできない道具しかなかった。

このどうしようもない不条理を恨みながら、少年は骨折を覚悟した。いま自分達の下には湖があるが、それもこの距離での落下には何の意味も成さないだろう。次の瞬間には三人のバラバラ死体と、重態患者が出来上がる。そう考え、固く目を閉じる。

すると、『ボフン』という緩衝材に当たったような感触を自分の背中に感じる。

その感触を何度か感じた後、落下のスピードがかなり減速したのを感じながら、背中から湖に入水した。

「……」

自身の体に損傷がないことを確認し、少年は慣れない泳ぎで湖から陸地へ這い上がる。陸地に上がってまず最初に、濡れた自身の服、『マスタースーツ』を力いっぱいひねって水を搾り出す。ぼたぼたと服から滴り落ちる水をじっと眺める少年を尻目に、同様に陸地に上がってきた三人の少年少女は口々にバリゾーゴンを吐く。

「し、信じられないわ！　まさか問答無用で引きずり込んだ挙句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだクソッタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

「……いや、石の中に呼ばれたら動けないでしょう？」

「俺は問題ない」

三人ともびしょ濡れではあるが死んでいないようだ。しかし、下手するとキャラロストするかもしれないのに石の中のほうが良いとは暢気なもんだ、と少年は考えながら今度はズボンの水を搾り出していく。濡れた服をそのままにして下手に風邪でもひいたら面倒だ。体に力が入らなくなり動きづらくなる為、戦闘に支障をきたすかもしれない。別に、今直ぐ何者かと闘うわけじゃないが、そう思って念入りに水を搾り出す。

「ここは何処なんだろう？」

三毛猫を抱いていた少女が、ノースリーブのジャケットを絞りながら呟いた。

「さあな。落ちてる最中に世界の果てっぽいのが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃねえか？

一つ確認したいんだが、お前達にも変な手紙が来たか？」

「そうだけど、〝お前〟は止めて。私の名前は久遠飛鳥よ。そっちの猫を抱いてる貴女は？」

「……春日部耀。以下同文」

水気の少なくなった服をはたきながら、あたりを見る。見渡す限り続く草原は、自分にとって新鮮で珍しい光景のように、なぜか思える。もしかしたら、自分の住んでいた世界……あの男、スティーブンは東京と言っていたが、東京はこの景色が普通のものではないのかもしれ

ない。
「よろしく、春日部さん。そちらの野蛮で凶暴そうな貴方は？」
「見たまんま野蛮で凶暴そうな逆廻十六夜です。粗野え凶悪で快楽主義と三拍子揃った駄目人間なので、用法と用量を守った適切な態度で接してくれお嬢様」
「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜くん」
ふと誰かからの視線を感じ、視線の元を探す。視線の元はどうやら自分の周りにある茂みからのようだ。よく見ると、茂みからは一対の長く黒い耳が見える。じっとそれを見ていると、耳はピクンッと動いた後、茂みの中へ隠れていった。
「それで？」
耳の出所に行ってみようとすると、自分の後ろから少し大きい声が聞こえてくる。振り向くとそこには気が強そうで赤いリボンを結んでいる黒い長髪の少女が、目じりを吊り上げながらこちらを見ている。他の二人も、長髪の少女同様なこちらに目を向けている。どうやらこちらに何か用があるようだ。
「さっきから我関せずって態度をとっているあなたは？」
それを聞き、思わず考え込んでしまう。自分の名前を言えといってきたのだ。自分の名前なんて、むしろ自分が知りたい状態なのだ。しかし、話しかけられたのならば返さないと、当然相手に不審に思われてしまう。
それは困る。自分はいきなりこんな場所に呼ばれて、自身の置かれている状況がわからないのだ。情報源となるかもしれない人物に不信感などもたれては、この世界のことや自身の置かれた状況を聞き出せないかもしれない。かと言って、素直に記憶がないと言うのも駄目だ。いきなり「記憶がない」と言われても、相手はその言葉を信用しかねるだろう。下手に嘘をつくよりも酷い事態を招くかもしれない。
「どうしたの？まさか、言う義理はないとでも言いたいのかしら」
考えているうちに、長髪の少女の機嫌が悪くなっていくのがわかる。他の二人も早く言え、と目で訴えている。
どうするか、どう見ても八方塞りな状況を前に少年は思わず背中に

冷や汗を流す。
　取り敢えず偽名を作らないと、そう思ったとき、ふと左手のホルダーに入っていたスマホの画面が目に入った。そこには相変わらず初期設定画面が映し出されている。少年はその画面のうち、名前の欄「ＮＡＭＥ　ＬＥＳＳ《名前未入力》」という字が目に入った。
「……」
　無表情で長髪の少女にスマホの画面を見せ、名前の欄に指を指す。少女はその欄を見ると、とたんに渋い顔をする。
「ＮＡＭＥ　ＬＥＳＳ？つまり、名前が無いって事かしら？」
　その言葉に首を振る。そういうことではない。すると、少女は少し考えた後、あぁっと声を上げて膝頭をたたく。
「もしかして、ナナシって名前なの？あなた」
　今度は頷く。すると少女は大仰にため息をつき、愚痴を言ってくる。
「ナナシって名前、名無しなのに名前があるなんて変じゃないかしら？それに、さっきからやたらと喋らないようにしてるけど、それってあなたのキャラなの？」
　正直、余計なお世話だ。名前に関しては、偽名が思いつかなかったから単にスマホ画面の「ＮＡＭＥ　ＬＥＳＳ」をもじって即興で作っただけだ。喋らないのは喋る必要が無いから喋らないのであって、決してキャラではない。その事を目で訴えかけると、長髪の少女はやがて観念したとでも言いたげにかぶりを振る。
「わかったわ。もう名前やあなたのキャラについて突っ込まないようにするわ。いちいち突っ込んでたら日が暮れそうだし」
　そういって、少女は優雅に手を差し出した。
「どうせ私達の自己紹介聞いてなかったでしょうから改めて。私は久遠飛鳥、よろしくね」
　この少女、飛鳥はどうやら、握手を求めているようだ。ならばそれに応えようと、自分もまた手を差し出そうとして
　『だから……わたしもい……にいって……しら？』
　急に聞こえたノイズ混じりの声と、フラッシュバックした金髪の女

性の姿に思わず手が止まった。
　誰の声だったのだろう?その声はこの場にいる人物のものではなかった。どこか懐かしいような、それでいて哀愁を感じる声だった。もしかしたら、前の世界で知り合った知人か何かの声だろうか。それとも
「どうしたの?」
　その声で、意識が現実へと引き戻される。目の前で手を差し出している飛鳥は、キョトンとした面持ちでこちらを見ている。なんでもない、と首を振り改めて差し出された飛鳥の手を握る。
　握手を終えた自分は他の二人、春日部耀と逆廻十六夜とも自己紹介を済ませ、四人でお互いの現状確認に当たる事になった。

◇

（うわぁ……四人とも問題児って感じですねぇ……）
　彼らを呼び出した張本人、黒うさぎと呼ばれる少女は、彼らのやり取りを茂みに隠れながら観察しつつそう思った。
　扇情的なミニスカートとガーターソックスを身に纏い、ウサギの耳を生やしたその姿は大変愛くるしい女の子のそれだが、彼女はれっきとした『箱庭の貴族』と呼ばれる強力な貴族の末裔で、可愛らしい外見からは想像のつかない程の力を持っている。
　そんな彼女は、彼らが現れた時にこの世界の事を説明するつもりで茂みにスタンバイしていたのだが、水の中に落とされた彼らはかなり機嫌が悪いみたいで、いま出てきたら酷い仕打ちを受けないだろうかと怖がって出るに出れないのだ。
　先ほどナナシという無表情な少年がこちらを見つめていた時など、「もしかして見つかった!?」と大いに焦ったものだ。その心配は杞憂だったようで、直ぐにナナシは目線を外して飛鳥という少女と何かしらやり取りしていたので気付かれてないと見ていいだろう。おそらく、結構あのナナシという少年は鈍いんでしょう、と黒うさぎは当たりをつける。

しかし、ナナシに気付かれなくても何時かは彼らの前に現れて、私達のコミュニティに案内しなければならない。そうしなければ、彼らを呼んだ意味が無い。

黒うさぎの目的は、かつて魔王に荒されボロボロになった自分達のコミュニティを立て直すことだ。その為には、ギフト保持者を自分達のコミュニティに引き入れて、ギフトゲームで闘う事の出来る人材を増やさなければいけない。そのギフト保持者というのが、彼らであった。

（彼らには私達のコミュニティ再興の命運がかかっているんです。何としても、人類最高峰と言われるギフト所持者である彼らを私達のコミュニティへ！）

「で、呼び出されたはいいけど何で誰もいねえんだよ。この場合、招待状に書かれた箱庭の事を説明する人間が現れるもんじゃねえのか？」

どうやら彼らは、箱庭の案内人がいない事について話しているようだ。このまま息を潜めて待っていてもしょうがない。案内人について話している今が、黒うさぎが比較的出てきやすいタイミングだろう。この機会を逃したら、黒うさぎは延々と茂みに隠れる羽目になる。黒うさぎは腹を括り、四人からの罵倒を受ける事を覚悟で茂みから出ようとする。すると

バンッバンッバンッ！

三発の銃声が鳴り響いた。

◇

「で、呼び出されたのはいいけど何で誰もいねぇんだよ。この場合、招待状に書かれた箱庭の事を説明する人間が現れるもんじゃねぇのか？」

「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」

「……。この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」

四人で互いの現状確認をしたところ、どうやらこの三人も自分と同

じように呼び出され、何が何だか分からないようだ。必死で偽名を考え不審がられないようにしたというのに、このままでは自分達の今後の行動方針が取れない。
こうなったら、背後にいる誰かに聞いてみるのも手かもしれない。敵かもしれない正体不明の輩に話しかけるのは、余り得策ではないが仕方ない。
ナナシはそう考え、背後の存在に襲われる事を考慮して、護身用の拳銃を挿してあるホルスターのボタンを外す。後ろからの攻撃（バックアタック）は死に直結するという事を、自身の名前を忘れてても其れは覚えているからだ。
スティーブンの口振りでは、自分が住んでいた東京には神や悪魔の闘いがあったらしいから、この知識は神と悪魔の闘いの中で得たものなのかもしれない。
「ーー仕方がねぇな。こうなったら……」
十六夜が溜め息交じりに呟くと、
ナナシの背後で動く気配がした。
ナナシはすかさずホルスターから銃を抜き、後ろ手で気配の足元に向かって何回かトリガーを引く。
バンッバンッバンッ！という銃声が鳴り、手に持っている銃口からは硝煙が立ち昇る。
「ド、ドヒャアァァッ!!」
ワンテンポ遅れて茂みからバニーガールの格好をした少女が奇妙な悲鳴をあげて仰向けに倒れる。少女の頭には長い耳がついており、耳と頭の付け根はあまりにも自然であった。人ではないのかもしれない。
その少女の足元には、銃弾が地面を大きく抉った跡が三つ出来ている。
今までただこちらを傍観していたのに先程急に動き出したのは、今まで隙をうかがっていたがしびれを切らして襲いかかろうとしてきた、といったところだろうか。警戒が必要だ。
「ちょちょ、おい！案内人かもしれない奴に何発砲してんだよ！発砲

するならせめて相手の顔を確認してからにしろ！」
少女が起き上がらないように、ホールドアップの要領で銃を突きつけていると、ヘッドホンをつけたアウトローな少年、十六夜はナナシのした行動に驚きながら非難の声をあげる。
「誰かいるってのはわかってたけど、流石にいきなり銃を撃つのはありえなくて?!」
「暴力、反対」
飛鳥や耀も同じように非難の声をあげる。どうやら口振りからするに、この三人もこの少女の気配に気付いていたようだ。襲われた時、三人を守りながらの戦闘は難しいと思ってこちらから仕掛けたのだが、どうやらそもそもその必要は無かったようだ。
「ひぃぃ！く、黒うさぎは善良な『箱庭の貴族』なのです！決して怪しい者ではありませぇぇぇん!!」
仰向けに倒れたままの自分の事を黒うさぎと言った少女は、両手をあげて真っ青な顔で自身の釈明を要求しだした。
そんな事を言っても、そもそも自分が発砲したのはそちらが怪しい動きをしたからであり、怪しい者ではないと言われてもこちらにとっては怪しく見えるのだから簡単に釈明できない。
更に言えば自分の事を怪しくないという奴ほど、怪しい者はいない。要は、信用できない。ので、銃口は少女に向いたままだ。
「ナナシ君、あなた誰かに野蛮だって言われたことは無い？」
無い、とは言えない。記憶が無いから分からないが、もしかしたらそんな事を言われていたのかもしれない。しかし、これはあくまで自分達の身を護ろうとして行った防衛行動である。今の自分は野蛮でも何でもない。
「ナナシ、いい加減銃を降ろせよ。そいつこちらに敵対する気は無いみてぇだし、そもそも俺たちはこの箱庭についての情報が必要なんだからよ」
「……」
十六夜にそう言われてナナシは少し考える。確かに十六夜の言う通り目の前の青くなっている少女からは、敵意は感じられない。それ

に、今の自分達は箱庭の情報少なからず必要だ。だが、警戒する必要はなくても、かといって簡単に信用する必要もない。
せめて襲わないと口約束だけでも交わしてもらおうと、銃口は向けたままジェスチャーで俺たちに手を出すな、と少女に伝える。
「イ、ＹＥＳ！黒うさぎは貴方達を襲いませんし手を出したりする気もありません！」
何とか言質も取れたので、ナナシは銃を降ろす。飛鳥や耀はその光景を見て安堵し、十六夜は「発砲することねぇだろ……」と呟き溜め息を吐く。銃を突きつけられた当の黒うさぎは、安心しながら先程までナナシを鈍いと思っていた自分を恨んだ。
問題児たちと黒うさぎのファーストコンタクトは、まさかの銃乱射から始まったのた。
そしてこの場にいたナナシ以外の四人はこの時、
「「「こいつ（ナナシ）、ヤバイ奴だ」」」
と偶然にも認識が一致したのだった。

◇

「ーーあ、あり得ない……。あり得ないのですよ。まさか話を聞いてもらおうとしたら発砲されるとは。学級崩壊とはきっとこのような状況を言うに違いないのデス」
「さっき私達の前で繰り広げられてたのはどう考えても殺人未遂の事件だったけど」
「いいからさっさと進めろ」
本気の涙を瞳に溜めながらも、黒うさぎはなんとか四人の前に姿を現し、自分の話を聞いてもらえる状況を作る事に成功した。
不機嫌な彼らにナニカサレないか黒うさぎは心配だったようだが、ナナシに発砲された以外は特に何もなかった。
ナナシ以外の問題児達は入水させた招待人を痛めつけてやろうかと思っていたのだが、黒うさぎがナナシに脅されているのを見て、そんな気も失せたそうだ。

そんな訳で、今問題児四人は『聞くだけ聞いてやるから早くしろ』という態度で彼女の言葉を待っている。
「それではいいですか、御四人様。定例文でいいますよ？いいますよ？いいますよ??」
「……」
「わ、分かりました！言います？直ぐ言います！言いますから銃は下げてください！」
黒うさぎの喋り方に少しイラッとしたナナシは、銃を突きつけて「さっさと言え」とうながすと、焦りながら黒うさぎはナナシの要望を呑んだ。少し引っ込んだ涙がまた黒うさぎの目尻に溜まる。流石に少し野蛮過ぎたかとナナシは反省する。
「えぇー、コホン。ようこそ〝箱庭の世界〟へ！我々は御四人様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼンさせていただこうかと、あなた達を召喚いたしました！」
「ギフトゲーム？」
その後黒うさぎの話す箱庭の説明を、問題児達は四者四様に受け取りながら聞く。
大まかにその説明を要約すると、
・この〝箱庭〟と呼ばれる世界は、様々な修羅神仏や精霊、幻獣に悪魔が存在し跋扈している。
・ここ〝箱庭〟ではギフトと呼ばれる特殊な能力を用いたゲームがあり、それをギフトゲームと言う。
・ギフトゲームでは〝食料〟や〝金品〟、〝土地〟に〝権利〟、〝人材〟や〝才能〟といった様々な物をチップにして戦い、勝利者は敗者の賭けたチップを得る事ができる
・箱庭にも法自体はあるが、ギフトゲームを介して取引したものは法的処置外となる
・ギフトゲームは参加する以外は全て自己責任となる
・ギフトゲームに参加するには、特定の集団『コミュニティ』に加入していなければならない

といったところだった。
ナナシ以外の問題児達はその話を聞いて違いはあれど、三者三様に面白そうに黒うさぎの説明を聞いていた。それはまるで、初めて世界の果てがある事を知り、自分の知らない場所に思いをはせる子供のようで、目がとても光り輝いている。
だが、ナナシはとてもじゃないがそんな気分にはなれなかった。ようは、目の前で話している少女、黒うさぎは、自分の勝手な思想と目的で自分達をわざわざ別世界に呼び出したということだ。
皆さんが楽しんで下さるよう良かれと思って呼んだと言ってくるが、良かれと思ってそんな事をされても迷惑なだけだし、さらに言えばどう考えても少女は何か下心があって呼び出したようにしか思えない。
そうでもなければ、自分達に拒否権を使わせず、無理やりにこの箱庭に呼び出したということに納得がいかない。「良かれと思って」呼び出したのなら、拒否権ぐらい確認するだろう。あくまでその人の為になるだろうという親切心で動いているのだから。そうなると、この少女は「この四人が自分にとって必要」だから呼び出したんだとわかる。
つい先程、少女が「自分達のコミュニティに加入してもらう」という
話を十六夜に拒否された時、かなり焦りながら十六夜を引き止めていたので、この予測は間違ってないだろう。
無論、自分達をこの世界に呼び出して困らせたかったというなら話は別だが。
つまり、この少女は自分達を箱庭に呼んだ上で、《何かを》させようとしているとしか思えないのだ。
そこまで考えて、ナナシは目の前の少女に対する心象が悪くなった。
〝自分勝手に人間を動かそうとしてくるあたり、結局こいつもあの神々や悪魔どもと大して変わらない〟
そう思うと、ナナシは吐き気がする程気分が悪くなる。

「……？」
ん？とナナシは自分が抱いた嫌悪感に疑問を覚えた。
何故自分はこの少女に対して、こうも悪い印象しか抱かないのだろうか。そして先程の〝あの神々や悪魔ども〟とは、いったい自分は何のことを言っていたのだろう。
「黒うさぎにはあなた達の質問を全て答える義務が御座います。しかし、それらを答えるには少々お時間がかかります。その間あなた達を野外に出しておくのは、こちらとしても忍びありません。ですので、後はよろしければ私達のコミュニティでお話ししたいのですが、よろしいでしょうか？」
先程の異様な嫌悪感は何だったのだろうと考えていると、どうやら黒うさぎは説明がひと段落したようで、ひとまず自分達に少女のコミュニティに来ないかと誘ってきた。
これはマズい流れだろう。こういうものは、一度行ってしまったら戻るのが難しいパターン、詐欺師がよく使う手だ。このまま相手の思い通りコミュニティに行ってしまうと、あれよあれよの内にコミュニティに入らされることになる。そして、さながら麻痺等で動けない輩に『ファンド』をするがごとく、金品を巻き上げられ行動の自由を奪われ、絞り尽くされるだろう。
別にコミュニティに入ってもいいのだが、入ったからといってナナシにとって得する事は無い。どれだけの金品や土地や利権を積まれても、今のナナシには何の旨味を感じない。
今欲しいのは、自分に関しての記憶だ。ナナシは、〝自分が何者なのか〟、それについて知りたいのだ。
それに関しては、この世界に留まるより、元いたという世界に戻った方が得策だろう。元いた世界には自分の知人だった人物や、自分の人柄、自分がしてきた行動の残滓のような、自分の記録があるかもしれないのだ。自分についての物が何もないこの世界で自分について調べるより、遥かにマシだ。
取り敢えず、少女の誘いを断ってから元の世界に返してもらおうと、ナナシは手を伸ばして物申そうとする。

「待てよ。まだ俺とこいつの質問が残っているだろう」
手を伸ばす途中で隣にいた十六夜が、先程までの軽薄な笑みを消して真剣な声音で黒うさぎに「俺たちに質問させろや」と言う。
その様子を見た黒うさぎは、構えるように十六夜に対して聞き返す。
「……何でしょうか？ルールについて聞きたいのですか？それともゲームそのものについてですか？」
「そんなのはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、黒うさぎ。ここでオマエに向かってルールをといただしたところで何かが変わるわけじゃねぇんだ。世界のルールを変えるのは革命家の仕事であって、プレイヤーの仕事じゃねぇ。俺が聞きたいのは、たった一つ」
そう言って十六夜は、黒うさぎから目線を外して他の三人、巨大な天幕に覆われた都市、と順に目を向ける。
そして彼は、何もかも全てを見下すような目で一言、
「この世界は……面白いか？」
「ーーーー」
そう言った。
その言葉を聞いた黒うさぎは少し面食らっていた顔をして固まっていたが、やがて顔を満面の笑みにすると、
「ＹＥＳ。『ギフトゲーム』は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭は外界よりも格段に面白いと、黒うさぎは保証します♪」
と返す。
それを聞いたナナシ以外の三人は満足したように笑う。どうやら、この三人はこの箱庭に留まるようだ。
損するだけだ、と止めようかとも思ったが、本人達が決めた以上その決めた道を邪魔するのも良くないか。とナナシは三人を止めることはしないでおく。
「おい、ナナシ。オマエも黒うさぎに聞きてぇことがあんだろ？俺たちはサッサと黒うさぎのコミュニティに行きてぇから早く聞いてこい」

そう十六夜に言われて、自分も用を済ませて元の世界へ戻ろうとする。黒うさぎの目の前に立つと、目の前の少女はビクンッと大きく震え、萎縮する。
「えっと、ど、どうかされましたか？先程までの説明に、不備が御座いましたか……？」
説明云々に言いたい事がない事は無いが、今言いたいのはそっちじゃ無い。ナナシは首を振る。
すると、黒うさぎは「えーっと」と目の前の少年がなにを言いたいのか考えてやがて、顔を青くしながら
「もしかして、元の世界に返して欲しい、と、か？」
しどろもどろに少年に尋ねる。
そうだ。ナナシはゆっくり頷く。
「えっと、ですね？皆様を呼び出すギフトは有ったんですが……。なんというか、その、元の世界に戻すギフトは今、持っていないと言いますか、その……」
しどろもどろ話されて面倒臭くなったのでナナシはまたも銃を抜き、少女の眉間に狙いを定める。
「ヒイィィ!?すいません！元の世界へ戻すギフトを持っていないんです！返す事が出来ないんです！許してくださいぃぃぃ!!」
両手を挙げて命乞いする少女を尻目に、ナナシは思い切り舌打ちをした後、銃をホルスターにしまってこれからの事を考える。
正直、参ったの一言だった。元の世界へ戻すギフトを持っていない、という事は、そのギフトは有るにはあるんだろう。
となれば、そのギフトを手に入れる為にギフトゲームなるものをしなければいけない。
そしてゲームに参加する為に、コミュニティに入らなければならない。
それに加えて、黒うさぎのコミュニティ以外に自分が所属できるのかどうか分からない。
もうこの、胡散臭い黒うさぎのコミュニティに入らざるを得ない状況になってしまったのだ。

「……」
だが、とナナシは少し考えを改める。元の世界に戻すギフトがあるのだったら、記憶を取り戻すギフトも存在するのではないか、と。別世界へ移動できるのと記憶を取り戻すのとだったら、詳しい事は分からないが、後者は簡単そうだと思える。もし記憶を取り戻すギフトがあったら、元の世界へ戻すギフトよりレアリティが低いのではないか。
つまり、記憶を取り戻すギフトを簡単に手に入れる事ができるのではないか、ということだ。そうだとすれば、元の世界へ戻るよりも格段に早く記憶を取り戻せるかもしれない。取り敢えず、そうポジティブに考える。向こうがこちらを利用するつもりなら、こちらも相手を利用するだけだ。
今この場で元の世界へ戻れない以上、ナナシはコミュニティに入る以外の選択肢しかないだろう。ナナシは「弱点は嫌だ弱点は嫌だ弱点は嫌だ」と怯えている黒うさぎに向き合い、手を差し出す。
「え、えと、これは……？」
「握手、でしょう？ナナシ君は、黒うさぎのコミュニティに入るんですって」
黒うさぎは、自分の手を見てあたふたしていたが、飛鳥の言葉を聞いて顔を明るくさせる。
「本当、ですか！ナナシさん！本当に?!」
「……」
「や、やたーっ！有難う御座います、ナナシさん！
無言で頷くと、少女はピョンピョンと嬉しそうに飛び跳ね回った後、ナナシの手を両手で包み、感謝の言葉をかける。
精々、そちらが自分達を利用するように、こちらもそちらを利用させてもらさせてもらおう。ナナシはそう考えながら、黒うさぎと握手を交わしたのだった。
〉ナナシは黒うさぎのコミュニティに入ることになった。

第二話「仲魔と悪魔」

問題児達との初コンタクトの後、黒うさぎは彼らを自分のコミュニティのリーダーである、ジンという少年に紹介する為、箱にの外壁と中側を繋げる階段の前に向かっていた。

しばらく歩いていると、遠目に石造りの階段に座るダボダボのローブを纏った少年が見えてくる。かなり幼く見えるがその少年こそ、黒うさぎのコミュニティのリーダーである、ジン・ラッセルだ。

「ジン坊っちゃーン！新しい方を連れてきましたよー！」

「あ、黒うさぎ。お帰り」

そう呼びかけるとジンは、はっと顔を持ち上げてこちらに向かって小走りで駆け寄ってくる。

「お疲れ様、黒うさぎ。そちらの女性二人が、件の？」

「はいな、こちらの御四人様がーー」

クルリ、と黒うさぎが振り返り、

カチン、と身体が固まる。

「……え、あれ？あの殿方二人は？ちょっと目つきが悪くて、かなり口が悪い全身から〝俺問題児！〟ってオーラを放つ殿方と、無口無表情で〝近寄んな〟オーラ放つ乱射魔の殿方は？」

「あぁ、十六夜君とナナシ君のこと？十六夜は〝ちょっと世界の果てを見てくるぜ！〟と言ってあっちの方へ行って、ナナシ君は何も言わず何処かへ行ってしまったわ」

それを聞いて黒うさぎは呆然とし、うさ耳を逆立てて問いただす。

「な、なんでお二人を止めてくれなかったんですか！」

「十六夜君は〝止めてくれるなよ〟って言ってたし、ナナシ君はしばらく左手の板切れをいじっていたかと思ったら、急にどっか行っちゃったんだもの」

「なら、どうして黒うさぎに言ってくれなかったんですか」

「二人から〝黒うさぎに言うなよ〟と言われてたから」

「嘘です！・絶対嘘です！・単に面倒くさかっただけでしょう！・そもそもナナシさんが喋るわけな
いでしょう！」
「「うん」」

二人の返答に黒うさぎは膝から崩れ落ちる。数時間前まで新たな人材に胸躍らせていた自分が妬ましい。
そんな黒うさぎとは対照的に、ジンは蒼白になって叫んだ。

「た、大変です！〝世界の果て〟にはギフトゲームのため野放しになっている幻獣が！果てではなくても、凶暴な魑魅魍魎達が箱庭の外にはうろついています！今二人は、かなり危険な状
況です！」
「あら、それは残念。もう彼らはゲームオーバー？」
「ゲーム参加前にゲームオーバー……？斬新？」
「冗談を言っている場合じゃありません！」

ジンは二人に事の重大さを伝えようとするが、二人はそれを聞いても肩をすくめるだけだ。
黒うさぎは一旦溜め息を吐き、立ち上がり。

「はぁ……ジン坊っちゃん。申し訳ありませんが、御二人様のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」
「わかった。黒うさぎはどうする？」
「問題児二人をとっ捕まえて参ります。事のついでにーー〝箱庭の貴族〟と謳われるこの黒うさぎをコケにした事を、骨の髄まで後悔させてやります……！」

先程までの悲しみから黒うさぎは立ち直り、怒りのオーラを身体中から噴出させ、ツヤのある黒髪を淡い緋色に染めていく。

「一刻程で戻ります！皆さんはゆっくりと箱庭ライフをご堪能下さいませ！」

そう言って、外門の柱に垂直に張り付いた後、猛烈な脚力で踏みしめる。全力で柱から跳躍した黒うさぎは弾丸の様に飛び去り、瞬く間に残った三人の視界から消えていった。

（はぁ……。どうやら此処に呼ばれた人達は、どうも一筋縄ではいかなそうだ。）

黒うさぎの去った後をボンヤリ見つめ、ジンは今後の自分達のコミュニティの雲行きを憂いた。

（そういえば）

ジンは少し前、黒うさぎと召喚の儀に立ち会わせた時の事を思い出す。

（たしか、彼らを呼び出すために出した手紙は、三通じゃなかったっけ。）

あの時確かに、出した手紙は三通だった。しかし、黒うさぎの話では、呼ばれたのは目の前にいる女性二人と、今どこにいるかわからない男性二人が呼び出されたそうだ。

一人、多いのだ。

もしかしたら、三人を召喚する時に、一人巻き込まれてしまったのだろうか？それとも、四人の内の誰か一人が時空を超えてこの箱庭に来たのだろうか。

結局この疑問が氷解する事はなく、目の前の女性達に箱庭の中を案内させてくれと頼まれ、ふと立ち上った疑問は自然と彼女らとの談話の中で、霧消してしまったのだった。

なお、この後喫茶店で一服していた三人の前にガルドが現れ、ジンのコミュニティの惨状をバラしたり、ガルドの悪行が暴かれたりと一悶着があった後、ガルドのコミュニティにギフトゲームを申し込む事になるのだが、それはまた後の話である。

◇

同時刻、ナナシは一人箱庭の果てを目指していた。

最初ナナシは黒うさぎについて行こうかと思ったが、左手のホルダーに入ったスマホを操作していた時に目に付いたメニュー欄のアプリを試す為に、先に箱庭の果てを目指す事にしたのだ。

初期設定を済ませたスマホには、三つのアプリが入っていた。

まず一つは『悪魔召喚プログラム』。説明が書かれてないので具体的にどうなるのかは分からないが、名前から察するに〝悪魔〟を文字通り〝召喚〟するアプリだろう。

スティーブンの言葉が？偽りのないものだとしたら、あの世界はこの箱庭同様に悪魔や神々が跋扈していた世界で、人はその中で暮らしていたそうだ。

という事は、前の世界は仲間となる悪魔、〝仲魔〟を召喚して、外を跋扈していた修羅神仏共と戦い、渡り合うのにこのアプリを使っていたのかもしれない。

その機能は前の世界、今の世界のどちらでも役に立つものだろう。そうなれば善は急げ。早速、仲魔を紹介して戦力を強化し、来たるギフトゲームの時に備えるべきだろう。

だがその前に、悪魔を仲魔にするにあたって確認するべきなのは、〝箱庭〟でその機能がしっかり動くかどうかだ。

別に召喚アプリが動くかどうかの確認は、箱庭でもできる。しかし、アプリが想定どうり動かなければ、大惨事を招くかもしれない。

悪魔が召喚されないくらいならまだしも、アプリが暴走して自分が扱えない程強大な悪魔が大量に、それも人々が生活している中で召喚されるかもしれないのだ。

いきなり箱庭の中でアプリが暴走し、強大な悪魔が無尽蔵に湧き出たら、それこそシャレにならない。
その為にも、箱庭という野内ではなくその外である野外に出て、アプリの機能の動作性を確認しなければならない。そしてなるべく、箱庭から遠い場所でそれを起動した方がいいだろう。
二つ目は、『邪教の館』。『悪魔召喚プログラム』の時とは違い、先程起動すると、ダミ声が印象的なヒゲのアプリ内のＡＩ、《ミドー》がアプリの使い方を説明してくれた。
《ミドー》曰く、このアプリは仲魔を合体し、より強い仲魔を〝創る〟ものだ、と。
そして、仲魔を得るには悪魔と交渉したり、服従させる事で仲魔を得ることができるのだ、と。
胡散臭い、と《ミドー》の言葉を疑ってかかったが、箱庭の果てに向かう途中で【スダマ】という悪魔に交渉をしかけてみると、
「チミ、ナナシ君?・チミの評判、仲間からいつも聞いてるよエブリデイ。チミ良い子みたいだから、ぼくちゃん仲魔になってあげるよ、ロハで」
そう言うと【スダマ】は目の前から消え、かわりにスマホのストックの欄に【スダマ】が追加されていた。
交渉する前にアプリポイントでインストールしたアプリ、『悪魔たらし』の影響もあるだろうが、悪魔を割と簡単に仲魔にできたのだ。
一体でも仲魔を得られたのはかなり大きいが、『邪教の館』アプリを試す為にも、あと何体か仲魔が欲しいところなのだ。
そこで、修羅神仏が跋扈している箱庭の外で悪魔を見つけ次第、片っ端からスカウトしまくる事にしたのだ。
そして三つ目、『マップアプリ』。正直、これが箱庭の外を目指す最大の理由となるアプリだ。
このアプリの機能はかなり凄い。
どう凄いのかというと、このアプリは自分がかつて通った場所を自

動でマップに登録し、同時に地図を作り出すのだ。
地図というのは探索の要ともなるが同時に、作るのに手間のかかる重要アイテムだ。
そう、地図作成には〝手間がかかる〟のだ。それこそ某、世界樹の根元のダンジョンを探索するＲＰＧだったりとか、二人のワイルド野郎が学園祭するＲＰＧ並に手がかかる。かといって面倒だと地図を作らなかったら、探索する時に迷ってしまうのは必至だろう。
そこでこの『マップアプリ』だ。あらかじめ探索する場所をスマホでサーチし、ただ歩き回るだけだ勝手に地図を作ってくれる為、重要なアイテムがお手軽にできあがる。しかもアプリの価格自体は只。このアプリを作る胴元が金欠になってないか心配になる。
こんなに有能なアプリ、今使わなければ製作者に失礼だろう。そうナナシは考え、この広い箱庭の外を〝マッピング〟する事に決めたのだ〟。
ここまで自分がマッピングに夢中になるのは、もしかしたらかつての自分もかなりのマッパーだったからなのかもしれない。半ば確信に近い空想がナナシの頭を駆ける。
そんなこんなで箱庭の外にサーチをかけたところ、この箱庭をマッピングすることも可能らしい。これだけ広ければ尚更地図を作りたくなってくるな、とナナシは意気込む。マッピングをするなら、まずはマップの端に行き、地図の空欄を埋めていく方が捗るだろう。ならばこの〝世界の果て〟まで歩を進めるとしよう。
そう考え、ナナシは〝世界の果て〟を目指すのだった。

◇

暫く走り続け、仲魔を集めながら箱庭の果てを目指していると、遠目に断崖絶壁と大きな湖が見えてきた。これが箱庭の果てだろうかとナナシがマップを覗くと、《ミカド湖》と書かれた水色の輪とここが果てだという証明である、ラインが引かれていた。
ここまでくれば、召喚の被害は起きないか、とナナシは考え『悪魔

召喚プログラム』を起動する。
『ＳＵＭＭＯＮ　ＯＫ』
その機械音声と共にスマホ画面に奇妙な六芒星が浮かび上がる。周囲にはバチバチと放電のような現象が起き、スマホの画面が光り出す。
パシュン、という音と共にナナシの目の前に異形の者が現れる。
現れた異形の者はとても不思議な姿をしており、頭は二つの馬頭でできていて、手足は蹄だが二足歩行をしている。体色は淡い青色で、どこか凛々しさを感じさせる佇まいをしていた。ひとまず、『悪魔召喚プログラム』の名の通り、悪魔を呼び出す事に成功できた事にナナシは安堵する。
「ほう、また我を召喚したかナナシよ。つくづく汝と我は固い繋がりで結ばれているようだ。よかろう、今回も汝の仲魔となり、力を貸そう」
召喚して直ぐ目の前の異形の者は、召喚者であるナナシにむかって嬉しそうに言う。召喚できただけでなく、自分の仲魔にまでなってくれるそうだ。そして口振りから察するに、この悪魔は記憶を失う前の自分の事を知っているみたいだ。
早速目の前の異形、《ケンタウロス》と呼ばれる悪魔に、自分の過去を聞いてみることにする。
「……なに？記憶がない、だと？それで自分が何者かを調べている？……随分ヨソヨソしい態度だと思っておったら、そういうことか」
腑に落ちたとでも言いたげに、《ケンタウロス》はしばらくうなづいく。
「ならば知る限りの事を汝に話してやろう。といっても、我は途中で別の悪魔と合体したから、合体した後の汝はどんなだったか知らん

が」

それでも良いから、自分は何者だったのか教えてくれ。そう目で言うと、《ケンタウロス》は「相、分かった」と言い、記憶を失う前の自分の事を話し出した。

「汝は我等、悪魔と戦う人外ハンターと呼ばれる職についていた。我がいた時はまだまだひよっこの立場だったがな。そんな汝に、仲魔として我を召喚した悪魔がおった」

心なしか《ケンタウロス》の目が鋭くなる。

「……《ダグザ》。汝の主である、ダヌー神族の長たる神だ」

『こぞ……、…いつ等を……せ！せい……俺たちの……てに……ってもらう！』

《ダグザ》、その名前を聞いて、脳裏に低い男の声が響く。初めて聞いたその声は、懐かしさを感じるもので、ナナシはその懐かしさに困惑する。ナナシの困惑を気に止めず、《ケンタウロス》は話を続ける

「《ダグザ》は汝を大層気に入っておったな。汝が何度も死ぬ目に遇わぬよう、我を汝の仲魔にするため我を奴の強大な呪力で縛り付けおった。まぁ、今では別に気にしてなどおらんが」

「……？」

何度も死ぬとは、どういうことだろうか。その口振りだと、自分は何度でも死ぬ、つまり何度でも生き返れるということにとれるが。そうナナシが言おうとすると。

ナナシの首もとに鋭い剣の一閃が飛んできた。

◇

ナナシが得体の知れない者の襲撃にを受けている丁度その時、黒うさぎは件の問題児の一人である十六夜が竜神を倒しているところを発見し、同時に自分の所属しているコミュニティが危機的状況だということが十六夜に発覚していた。

黒うさぎの必死の懇願の甲斐あってか、十六夜はコミュニティに協力してくれるようになったが、他の問題児達に現在のコミュニティの現状を伝えるように、十六夜に言われてしまう。

本当の事を言って、あの方々は協力してくれるだろうか。主にナナシが。

「……あ！そ、そうでした！ナナシさんも探し出さなければいけないんでした！」

「ん？ナナシがどうしたんだよ？」

先程からやらなければいけないことや、度肝を抜くような事が頻発していた為、ナナシも探しさなければならないのを忘れていた事に黒うさぎは気付く。

「ナナシさんがいつの間にか黒うさぎ達からはぐれてしまったのですよ！箱庭の外は、さまざまな人外の者達が人間を襲おうと、目を光らせているのです！いくら乱射魔のナナシさんでも、危険過ぎるんです！」

「やはは！要はあいつ、迷子になってんのか！命がけの迷子たぁ、なかなか斬新な趣向じゃねぇか！」

「冗談を言っている場合ではありません！」

ナナシの危機的状況を十六夜に伝えるが、今はコミュニティ内で詳しい説明を受けているであろう問題児の内二人と同様に、十六夜は特に反省した様子もなく、やははと笑っている。
「はぁ……。仕方有りません。ナナシさんを一刻も早く探し出しましょう！そして、事情を聞いてもらえるだけ聞いてもらって、さっさと半殺しにされましょう！万が一、億に一に、絶対無いでしょうけど、ナナシさんが協力して下されば儲けものです！」
「もうお前の中ではあいつに断られる前提なんだな……」
「むしろ、半殺しで済んだら良いなとすら思えますよ……」
「どうだろ。あいつはお前の企みに気づいた上で、お前のコミュニティに入ったように見えたが」

十六夜のその言葉を聞き、黒うさぎは不思議な顔をする。

「え？でしたら、何でナナシさんは私たちのコミュニティに入ってくださったのでしょう？利益になるようなことなんて、ないですのに」
「さぁ？ナナシはナナシなりに、なにか考えて入ったんだろ」

黒うさぎの問いに十六夜はそうとだけ言って、「それより、ナナシを探すぞ」と黒うさぎに背を向けて走り出す。
「え！あ、ちょっと待ってください十六夜さん！というか速!?」
予想以上のスピードで走る十六夜に驚きながらも、「黒うさぎの前を走るだなんて百年速いのですよ！」と十六夜の後を黒うさぎは追いかける。亜光速で走る二人は、そのままナナシを探しに行ったのだった。

◇

首に一文字の切り傷が入る。遅れて、赤く少し粘性のある血液が、つうっと流れる。ナナシの首を的確に狙った剣戟は、ナナシ本人の

とった回避行動によって避けられる。しかし剣戟の余波まではかわせず、ナナシは首の皮一枚裂かれてしまう。
「ほう……まさか、かわされるとは思わなかったぜ」
ナナシのすぐ横で粗暴そうな声が発される。二撃目がくる、そう予感して声の聞こえた方から飛び退くようにナナシは動く。シャッ！という音が元いた場所からする。二刀の剣を避けたナナシの目が、飛び退いた瞬間に、その剣戟を放つ輩を捉える。

それは、豹の姿をしていた。しかし、その手足は人間のように、二本の足で立ち二本の手で剣を振るっている。まさに王者、といった風格をその肢体から放っており、しかもそれはファッションなのか、厳ついふんどしで股を隠し、緑のマントを羽織っている。
その豹は、ナナシを敵意に満ちた目で見据え、静かに

「今度は外さんぞ」

殺し合いの開始を、宣言する。

第三話「乱射魔、跡を濁す」

「にしても、ナナシさんを探そうにも手がかりがないですねぇ……」

「ま、気長に探すしかねぇんじゃねぇのか？かくれんぼってのは、焦るとドツボにはまってより見つけにくいからな」

「かくれんぼって……あぁ、もういいですかくれんぼで良いですから、早くナナシさんを見つけましょう……」

黒ウサギと十六夜は、勝手に失踪したナナシを捜索するため、十六夜を捜索していたときに手がかりをくれたユニコーンに会いに森の中へ入っていた。十六夜の時同様に、ナナシの目撃情報をくれるかもしれないと思ったからだ。だが

「おかしいですねぇ、ここは人外の魔物達が沢山いるはずなんですけど……」

「たまたま居ないだけ、つーわりには辺りに気配が無さすぎるな」

「えぇ、いつもは数歩あるけば魔物に遭遇するような場所なんですよ。それがこんなに静かになっているなんて……」

森のなかにはユニコーンはおろか、魔物がひとつも居ない有り様だった。ユニコーンに聞けずとも、森の魔物達に聞くこともできるので黒ウサギはこの森で情報収集するつもりだったのだが、この様子だとそれも難しいようだ。

「森の奴等が一斉に居なくなったのか？……そいつぁ、穏やかじゃねぇな」

十六夜は有名な幽霊船、メアリー・セレスト号の事例を思い出した。あの船の船員のように森の魔物達が、まるで神隠しに会ったかのように消えてしまった事に十六夜の危機感が高まる。そしてしばらく森の中を探し、黒ウサギがあるものを見つける。

「あ、十六夜さん見てください！この木に血痕と刃物で切られた跡が付いてます！という事は……！」

「ここにいた奴等が居ねぇのは、誰かに襲われてしまったからと見て間違いねぇだろうな」

みれば、周囲にはなにか鋭いもので切られてなぎ倒された大木がゴロゴロと転がっており、それと同時に大量の血痕がぶちまけられている。血の乾き具合から、一時間は経っていないだろうとわかる。

凄まじい光景に、十六夜は思わず閉口する。その一方で、黒ウサギはとたんに慌て始めた。

「ま、不味いですよ！こんな惨状を引き起こせて、魔物達を全て消すことができるのは、神格持ちか魔王クラスです！それが、今、私達の近くにいるかもしれません！」

「ヤハハ、魔王の存在を聞いて小一時間してから、そいつらと闘うことになんのか。そいつらチュートリアルみたく手加減してくんねぇかな」

「よ、余裕かましてる場合じゃないですよ十六夜さん！あの龍神は倒せても、魔王はそういうわけにはいきません！世界全体に仇なす者、それが魔王なんですよ！」

ここにくるまでの間、十六夜は黒ウサギのコミュニティを崩壊させた、魔王という存在についての話を聞いていた。魔王とは並外れた力

を持つ数ある存在の中で、例外なく人々や世界自体に仇なす存在で、「いつかは必ず敗れる」という制約を持つ代わりに強大な力を有しているらしい。強制的にギフトゲームに参加させたり、本来の力以上の力を引き出すことができたりと、聞くだけでも【魔王】という存在の強大さを感じることができた。

だからこそ、余裕かましている場合ではない事を、十六夜はとうに理解できていた。魔王のことなどほとんど知らない自分がいまここで魔王に闘いを挑んだとして、どれだけその魔王と対等に渡り合えるかしれたものではないのだ。

だが、だからといって取り乱してしまえば、動ける場面で動けなくなる。それだけは、なんとか避けなければならない。魔王に立ち向かうにも、背を向けるにも、いざという場面で動けなくなっては意味がないからだ。

いつ襲いくるかもしれない魔王の存在を警戒し、未だに焦っている黒ウサギの説教を聞き流しながら、十六夜は周囲の気配を慎重に探っていく。すると

「……!そこにだれかいるな」

「え!……あ、本当だ、木の陰に隠れていますね」

十六夜は自分達の前方百メートル先の木陰に潜んでいる気配に気付いた。しかし、魔王然とした気配ではなく、何かに怯えている事が感じられるほど怯えきったものだった。

「もしかしたら、何とか生き延びれた方かもしれません。いってみましょう!」

もしかしたら、この惨状についてなにか知っているのかも知れな

い。そう思い、十六夜は気配の元へ駆け寄る黒ウサギの後をおっていく。

十六夜達が木陰にたどり着くと、衰弱した様子の男が木の根本でぐったりと横たわっていた。やせ細った体に栄養失調特有の奇特に膨らんだ腹、体全体が血の気の引いた紫色で、その顔は醜いものだった。

みれば、その男の体にはおびただしい程の傷口がついており、そこから赤黒い血が出ている。

その男をみて、十六夜は昔見た仏教の経典に書かれた、一つの悪鬼の名が脳裏に浮かんだ。

「こいつ、もしかして餓鬼ってやつか」

「はい。輪廻転生の六道の内、餓鬼道に転生した人の、餓鬼です。おそらく、餓鬼道の世界から何らかの影響でこの箱庭の世界に行き着いたのでしょう。」

餓鬼というのは、仏教の輪廻転生の転生先の一つである、餓鬼道で生を受けた存在だ。

その体は常に呪われており、何か食物を口にいれようとする度に、目の前で食物が一瞬で消えてしまう。そして、生きている限り空腹で身をやつし続けるのだ。

十六夜達が意識があるかどうか調べるために、その餓鬼の傍へ駆け寄ろうとすると、突然餓鬼はパッと目を開けて後ろへ跳びすさった。

「ひいぃ!か、勘弁してくれぇ!お、俺を殺しても何にもならんでしょお!」

見に覚えのない命乞いをされ、二人は少しばかり困惑してしまう。

「ちょ、ちょっと待ってください。私達はあなたに危害を加えるつも

りはないですから!!」

突然命乞いを始めた餓鬼に黒ウサギが敵意はないことを伝えると、餓鬼は呆けたように黒ウサギを見つめる。しばらく黒ウサギをまじまじと見つめてから、ふぅーっ、と餓鬼はため息をつく。

「よ、良かった……。〝あの悪魔〟じゃねぇのか、焦らせやがって。なんか強大な気配がしたもんだから、あの野郎が戻ったのかと思ったら、〝月のウサギ〟かよ……」

どうやら、十六夜達のことをこの森の魔物達を襲った人物だと勘違いして、命乞いしたようだった。

心底、安心した様子の餓鬼に、黒ウサギが事情を聞こうと話しかける。

「あの、〝あの悪魔〟とは何なのですか?あなたもその輩に襲われたようにお見受けしますが、よければこの森で何があったのか教えて頂けませんか?」

黒ウサギがそういうと、餓鬼は苦虫を噛み潰したかのように顔を歪めて、この森にきた〝悪魔〟の事を喋りはじめた。

「つい半時ほど前だ。ユニコーンがこの森に来ている事を知った俺はダチ公、そいつも餓鬼なんだが、そいつととそのユニコーンに会うことにしたんだ。ここいらでユニコーンが居るなんてこたぁ、滅多にねぇからな。物珍しさに釣られてユニコーンを見に行ったんだ。そしたら〝奴〟がいたんだ」

「や、〝奴〟ですか?」

「〝奴〟ねぇ。そいつが、てめぇの言っていた〝悪魔〟なのか?」

「あぁそうだ。あいつはまさに〝悪魔〟そのものだった……」

十六夜の問に答え、餓鬼は一息ついてから再び話す。

「見れば、上物の刀を持ってるものだから、奪い取ってやろうと言って俺のダチ公がそいつの後ろから飛び掛かったんだ。俺も面白半分で茂みに隠れてダチ公が飛び掛かるのを眺めてたんだ。そして」

餓鬼は一旦間を開ける。

「飛び掛かった瞬間、刀で両断された。〝奴〟は後ろから飛びついた俺のダチ公を、何でもないように切り捨てたんだ」

「……」

その光景を想像し、黒ウサギは身震いした。餓鬼とはいえ、彼らは鬼だ。その鬼の奇襲を難なくかわし、反撃に転じた〝悪魔〟の力の一端を想像し、黒ウサギは震えたのだ。

一方で十六夜は十六夜で、餓鬼の言葉から、この森で起こった惨状に見当をつけていた。

「なるほどな。そのダチ公が殺られたのを見て、今度は激情に駆られたテメェが〝奴〟に襲いかかった。だが、またしても返り討ちにあい、その戦闘の余波でこの森の魔物の誰かに飛び火した。それに怒った魔物達が〝奴〟に戦いを挑み、それでいつしか強盗事件が〝奴〟とこの森の魔物達と全面戦争になった。……この森で起こったのは、そんなところだろう？」

「その通りだ。さっきの話までそこまで察っせれるたぁ、やるなそこの兄ちゃん。」

「ヤハハ、誉めてもでてくるのは俺の拳骨くらいだぜ」

そんなふうに冗談めかして言うが、十六夜の内心は穏やかではなかった。森という地形上、木々が自分達の視界を遮られる為、いま自分達はどこから奇襲を受けてもおかしくない状況なのだ。

「ヤハハ！参ったな、ナナシに続いて俺達もいきなりゲームオーバーの可能性が出てきたぞ」

「ちょっと不吉なこと言わないで下さいよ！あと勝手にナナシさんを殺さないでください！」

そこで黒ウサギがハッとした顔になり、いきなり餓鬼に詰め寄る。その顔はかなり鬼気迫ったもので、詰め寄られた餓鬼は思わずたじろぐ。

「こ、ここに！目付きの悪くて、髪型がソフトモヒカンで、いかにも銃を乱射しそうな人間が来ませんでしたか!?」

すると、餓鬼は顔をしかめ

「あぁ、来たよ」

と答えた。

その瞬間、黒ウサギは顔を蒼白にし、ペタリと座りこんでしまった。ナナシがここに来たということは、既にこの惨状を作り出した張本人と出会ってしまったかもしれないのだ。

この森に住む魔物全員と魔王クラスの戦争に、巻き込まれたかもしれないのだ。ナナシの存命は、ほぼあり得ないだろう。

「ど、どうしましょう……。ナナシさんが、本当に死んでしまったかもしれないなんて……。こ、これじゃあ私、私……」

「……？」

その事に黒ウサギが心を痛めるのは普通のことであり、自分を責めてしまうのは、止められないことだろう。

だが黒ウサギの様子は、なぜか十六夜に奇異な印象を持たせた。

黒ウサギの様子が、あまりにも大げさというか、閣下（かっかかっか）過剰な反応をしているように十六夜は思えたのだ。

確かにナナシがこんな状況になったのは、黒ウサギの監督不行き届きとも言えるし、コミュニティに入ると言ってくれたナナシが死んでしまったかもしれない事に悲しむのは当然だ。

だが、それと同時にナナシと黒ウサギは、出会って数時間程度の関係だ。しかも出会いは銃口を突き付けられホールドアップさせられるという、世界中探してもこれ以上のものはないと思えるほどの、最悪な出会いかただった。

それがどうだ。

黒ウサギはそんなナナシを思って、顔をこれ以上なく青白くさせ、体全体を痙攣したかの様に震わせている。涙を流したり、顔を曇らせるのならばまだわかるが、ここまで来ると大げさを通り越して不憫に思えてしまう程だ。

「……黒ウサギ、悲しむのは後だ。今はまず俺たちが助かることを第一に考えねぇと、俺達もナナシの後を追うことになっちまう。……ナナシの死を弔うのは、この危機を切り抜けてからでも、遅くはねぇだろ」

しかし、十六夜はその事に深く追求することを止めた。今はそれよりも、自分たちの存命に力を入れないといけないと思ったからだ。

それに黒ウサギは、出会って数時間だが、とてもお人好しだと思わせるほど、人徳的だった。ならば、知人の死にそれだけの反応を示すのはおかしいことではないのかもしれない。

そう考えて、黒ウサギに肩を貸して立ち上がらせる。少しの間背中をさすってみせれば、黒ウサギは徐々に落ち着きを取り戻していった。顔はまだ青白いが幾分かはマシになり、震えは段々と引いていった。

「そ……う、ですね。まずは、自分たちの心配をしましょうか。それが終わってからから、ナナシさんの事を考えましょうか……。それに、まだその魔王に殺されたと決まった訳じゃありませんしね」

「……ああ」

一先ず黒ウサギの「混乱」を解くことはできたが、自分たちの置かれた状況の打開になったわけではない。さて、この事態をどう切り抜けるかと十六夜が思考を張り巡らせていると

「おいおい、あんたら。俺の話をちゃんと聞いてたのか？」

餓鬼が、急に話しかけてきた。先程まで静かにしていた餓鬼が言った「話をちゃんと聞いていたのか？」の意図がわからず、十六夜は思わず聞き返す。

「あん？どういう意味だ？」

「文字通り、『話をちゃんと聞いてたのか？』って言ってんだ。さっきまで俺が親切丁寧に、ここに来た〝悪魔〟の恐ろしさを教えてやったじゃねぇか。なにお前ら、その〝悪魔〟の心配してんだよ」

「「……ん？」」

その言葉の意味が解らず、黒ウサギと十六夜は同時に困惑した声をあげる。

二人の様子を見て、餓鬼はため息をつく。

「あのなぁ、言っただろうが。この森に来た奴が、俺のダチ公と魔物をメチャクチャにしたって。なんでソイツが自分に殺されなきゃいけねぇんだよ」

「……」

餓鬼の物言いに、二人は違和感を覚え始めた。自分に殺されなきゃいけない……？それは、どういうことなのだろうか。そんな二人を差し置いて、餓鬼は二人にまくし立てる。

「ったく、本当に恐ろしかったんだぜ。人間とは思えねぇ強さだった。剣の腕もたつ上に、銃をそこかしこに乱射しまくってよぉ。しかも不気味なことに、魔物達を殺さず半殺しにして、そいつら全員一人一人に『仲魔にならないか？』って聞いて回ったんだ！しかも「仲魔にならない」って言った奴は殺されちまうし、その声も腕に着けた機械の機械音声で本人は全く喋ってねぇし、本当に人間離れした、まさに〝悪魔〟みてぇな野郎だったぜ、全く……。あのソフトモヒカンは、伊達じゃあなかったんだな」

「……ん!?」

餓鬼の言う〝悪魔〟の特徴に、二人は半端じゃない既視感を覚えた。二人が惨状たる現場を遠目に、かつ目を凝らすと、先程までは気付かなかったが、地面に数個の弾痕があった。

『人間』

『銃を乱射』

『一切喋らない』

『ソフトモヒカン』

この特徴は、あまりにも、二人の知るある人物像に被りすぎていた。

「……あ、あの、十六夜さん？これって……？」

「十中八九、お前が今考えている内容で、間違いないと思うぜ、黒ウサギ……」

つまり、今まで自分達が魔王に殺されたかもしれないと思っていた人物は、森の魔物達と魔王の戦争に巻き込まれたと思っていた人物は

「……魔王の正体は、ナナシだった」

森の魔物達の戦争を起こした張本人で、先程まで自分達の命を脅かす魔王だと思っていた、我らが探し人、ナナシだった。

「……」

「……」

「おい、なに急に黙りこくってんだ？お前らもここから立ち去った方がいいぞ。さもないと、森の魔物どもみてぇに無理やり仲魔されちま……」

「おい、餓鬼」

「う、ってなんだよ、今度は」

「ソイツがどの方角へ行ったか、分かるか」

「あん？ここからあっち、東北東へ向かっていったが……」

「行くか、黒ウサギ。東北東の方角へ」

「そうですね、十六夜さん」

その二人のやり取りに餓鬼は驚きだした。

「正気かテメェら!?やめとけってマジで！」

「ヤハハ。にしても、まさかナナシが魔王の正体だったとは、衝撃の真実ってやつだなこりゃあ」

「もう……なんだか私、どっと疲れましたよ。ナナシさんは実力者だとは思ってましたけど、ここまでだったとは……」

「しかも、黒ウサギはそのナナシに殺されるかもってビクついてたからなぁ。思い出すだけで笑いが込み上げてきちまう」

「それは十六夜さんもでしょう！全く失礼なんですから！」

「って無視すんなお前らぁ!!」

二人の後方で餓鬼が騒ぎ散らすが、二人は無視する。どこぞの迷惑な知人のせいで、無駄に疲れているのだ、返事を返してやる余裕なぞ、今の二人には微塵もない。

結局二人は、遠くから騒ぎ立てる餓鬼を無視して東北東に向かったのだった。

◇

豹が宣戦布告をした瞬間、ナナシの眼前に突如として黒い紙が現れ

る。
ギフトゲーム『東の守護』
そう書かれた紙を見て、ナナシは黒ウサギから聞いていたギフトゲームというゲームの説明を思い出す。
黒ウサギの話の話では、ギフトゲームは互いの了承がなければ行うことが出来ない筈だった。しかし今現在、ナナシは何者かにギフトゲームの名目で襲われている。通常では考えられない事が起きているのだ。

「……」

だとすれば目の前にいるこの豹は、何らかの抜け道を使ったか、ルールを無視して自分に襲いかかってきたというところだろう。
しかし、例外というものは何にでもあるものだ。今はとにかく目の前の豹を倒さなければならない。これ以上うだうだと考えすぎて、うっかりこの豹にスライスされても困る。

ナナシはすぐさま「デビルアナライズ」を起動させ、目の前の豹にスマホのカメラを向ける。パシャリと写真をとると、スマホは豹と豹のステータスである数値を画像として表示する。

【堕天使】　オセ　Ｌｖ３２
弱点・耐性［？］
ＨＰ　???／???　ＭＰ　???／???
使用技　？

アプリ「デビルアナライズ」で判明したのはレベル３２とオセというステータスだけ。あとは［？］マークがついていてわからない。
更にスマホの画面を横にスライドさせて、自分のステータスを表示させる。

【人間】ナナシ　Ｌｖ２８
弱点［無し］・耐性［物理・銃・呪殺］
無効［破魔］
ＨＰ　３２６／３２６　ＭＰ　１２４／１２４
使用技　無し

「用はすんだか」

スマホ画面から顔をあげるとその豹、オセは毅然とその場所で腕を組んで立っている。先程スマホのデビルアナライズを使っている間、僅か二秒の間だが、オセはその気になれば襲いかかれたのだろう。デビルアナライズを使わせないようにすることもできた。

だが、そうはしなかった。奴は自分の勝利を確信しており、尚且つ自分とオセの間の力量差に絶望する自分の姿を見ておこうと思ったのだろうと、ナナシは当たりをつける。目の前のフンドシをはいた豹、もといオセが勝ちを確信してると思うと無性に苛立つが、Ｌｖ４の差がいまいちよくわからず、先に仕掛けることが出来ないでいるのも事実だ。

「仕掛けないのか？ならば……」

どう、動こうかと考えている内に、向こうはしびれを切らしてしまう。腰に差した刀剣を鞘から抜き、その切っ先を自分に向ける。妖しい白銀の光がぬらりとその刃から放たれ、その光の並々ならぬプレッシャーに、ナナシは思わず自分が押し潰されるような錯覚を覚える。

「……！」

刹那、オセは刀剣を鞘から一瞬で抜き放ち、ナナシに突っ込んでく

る。初撃を見切ってはいたものの、予想以上に目の前のオセの動きが早く、完全に対応するのが難しい。ダメージ覚悟でこちらも剣を抜き、オセの目の前に突き出す。

「ふん!」

しかし、突き出そうとしたところで自分とオセの間にケンタウロスが割り込み、オセの一撃を蹄で受け止める。

「ナナシ、今は少々こちらの分が悪い。一騎討ちではなく集団戦で討ち取るのだ!仲魔を召還する時間は稼いどいてやる!」

願ってもまないチャンスだ。Ｌｖが上の相手と一対一で闘って勝つのはかなり難しいだろう。しかし、一人の相手を複数で相手取れば、負けづらくなる。ようは囲んで棒で叩くのだ。このやり方にスゴク、シツレイ!と傍から見る人がいればそう思うかもしれないが、背に腹は代えられない。

素早くスマホを操作し、ナナシはケンタウロスの指示通り仲魔を召還する。

「もうお仕事?社畜はつらいよやんなるよ」

一体目はスダマ。働きたくないと不平を抜かしてはいるものの、ちゃんとストックから召還されている。スダマが召還されたのを確かめてから、二体目を召還する。

「うぉれぇがぁぁぁぁ!!うぉれぇたちがぁぁ!!!チミモウリョウだぁぁぁぁ!!!」

二体目はモウリョウ。やはり訳のわからないことを言いながら現れるが、反抗する様子はない。スカウトしたばかりの仲魔達が言うこ

とを聞いてくれるかしんぱいだったが、どうやらちゃんと命令を聞いてくれそうだ。

「ふぅん！」

「ぐっ!!ナナシ、後はうまくやるんだぞ！」

モウリョウを召還したところで、オセと打ち合っていたケンタウロスが、オセの一撃をかわしきれずマグネタイトとして霧散してしまう。

Ｌｖ差は二十八、稼いでくれた時間は十秒、それもケンタウロスは全力でオセはずいぶん余力を残しての結果だった。まさに天と地ほどの差。Ｌｖ２８の差は、それほどまでに大きいものだった。そしてＬｖ４差の自分との戦闘も、この様子だと簡単にはいかないだろう。

ケンタウロスを倒した直後、もうこの瞬間が最後の召還のチャンスだ。ケンタウロスの穴を埋めるためにもう一体召還しよう。そう考え、ストックからもう一体、仲魔を召還する。

「……」

三体目はユニコーン。餓鬼が襲ってきた森のなかで、脅しをきかせて仲魔にした悪魔だ。最初こそ「私は既にコミュニティに入っている」と仲魔になるのを拒んでいたものの、銃を額に突きつけ脅したところ、あっさりと仲魔になった。

「……」

しかし仲魔になったものの、当人はまだ脅された事を根にもっているようで、先程から目を合わせてくれない。

元はと言えば、自分が森で餓鬼や森中の悪魔達に襲われながらも（正当防衛として）なぎ倒していった時に、このユニコーンが「森の秩序を人間ごときが破壊するか！このコミュニティ『一角獣』の三本槍、

ユニコーンが貴様に相応しい罰を与えよう!!」と襲いかかってきたから迎え撃ったのであって、自分は悪くない。
とにかくユニコーンの視界の前に出て、目を無理矢理にでも合わせる。

「……」
「……ふん」

存分に働いてもらうぞ、と目で言うとユニコーンは不服そうに鼻をならし、キッとオセを睨む。こちらも命令を聞いてくれるかどうかを心配しなくてもよさそうだった。ひとまず安心する。
これ以上は召還に充分なマグネタイトがこの空間にないので、召還は出来そうにない。現状、三体以上の仲魔の召還は難しそうだ。

「ふん。仲魔を並べたか。だが、弱い仲魔が集まったところでそれだけではただの烏合の集だな」

ケンタウロスを屠り、オセはすぐさま標的をナナシのパーティーに絞り、手に持つ刀剣の刃先を向けて突進してくる。その刃先をナナシはつん曲がった剣、『天叢雲剣』で受け止める。

「……!」

二人は必然的につば競り合いをし、お互いの得物からキィンッ!という高音がなる。そして受け止めてみて、ナナシははっきりと解る。腕力は向こうが上であると。

「ちぃがぁぁぁう!!うぉ、うぉまえわぁぁぁ!!チミモウリョウでぇは、ぬぅわぁぁぁぃ!!!」
〝アタック〟
「お仕事終えて、有給とるよ。行きたいね、イスタンブール」

〝ザン〟
「はぁっ!!」
〝アタック〟

つば競り合いに若干押され始めた時、すかさず仲魔達がフォローに入ってくれる。しかし三匹全員の攻撃を受けたというのに、オセにダメージがほとんど通っていないようだった。それだけのレベル差があるのだ、この悪魔とは。

「……!」

突然フッと、オセは得物を持つ力を弱め、つば競り合いから離脱し、少しだけ後方へ距離を開けて〝溜め始めた〟。
不味い、ナナシがそう思った瞬間。

「はぁっ!!」
〝ベノンザッパー〟

オセは毒気を含んだ剣戟を繰り出してくる。その剣戟は同時に毒の衝撃波を生み出し、圧倒的な暴力をもってしてナナシ達に襲いかかる。
仲魔にガードするよう命令を出そうとナナシはしたが、それを実行するのは無理だろう。仲魔達は既に行動していてガードがとれない。隙だらけだ。

「い、いてぇぇぇよぉぉぉ!!」
モウリョウ　ＨＰ　１０２／１８０　　毒
「あ、僕土星に帰らなきゃ。それじゃ、サヨナラまた来て三角四角」
スダマ　ＨＰ　０／８４　死亡
「ぐっ！」
ユニコーン　ＨＰ　１２５／２０４　　毒

「……ッ！」

ナナシ　　ＨＰ　　２８３／３２６

スダマは耐えれず霧散し、他の二人も馬鹿に出来ないダメージを受けてしまった。自分は剣でガードしていたから、まだ大丈夫だ。しかし他二人はダメージと毒のバッドステータスを受けてしまっている。

集団で攻めたのに、あっとあうまに一体を倒され、数の利点が失いつつあった。

仲魔二体は毒状態で持久戦に持ち込むどころか、次のターンでオセの攻撃と毒のダメージで二体共死ぬかもしれない。

そうなると、短期決戦しか無い。しかし

「ふふん？その程度か、貴様ら。殺す価値もないとは、この事だな」

オセが、強すぎる。また全員で集中攻撃を仕掛けても、全体攻撃をされて全滅だ。かといって単騎でオセと自分でまた打ち合っても、自分が勝つ確率は低い。せめて強い仲魔がいたら、また話は変わっていただろう。しかし、いまストックにいる最高Ｌｖの悪魔は２４のユニコーンだ。手持ちにオセに敵う仲魔は……。

「……！」

そこでナナシは策を思い付く。逆転の、それでいてこちらの分が悪い策。

すぐさまナナシは仲魔達と目を合わせ、目の動きで指示を出す。

モウリョウはただでさえ酷い顔をさらに嫌そうな顔で歪め、ユニコーンは正気なのかと目を丸くさせる。

しかし二体共に直ぐに腹をくくり、再びオセに向き直る。命令を、聞いてくれる。最大の懸念であった、仲魔達のボイコットは、起こらなかった。

ここからは、完全な運任せだ。どれかひとつでも失敗すれば、パー

ティーは全滅だ。たとえ全部うまくいっても、ぜったいに勝てる訳じゃない。しかし

「……」

それと同時に、絶対勝てるという自信が、ナナシの心に沸々と浮かんでいた。

◇

（打つ手は無いだろうな）

オセは目の前のナナシにたいして、そう推測する。いや、推測というよりは、確信のほうが近いだろうか。なんにせよ、ナナシに残された道は《死》だけだ。

いくら仲魔を召還しようとも、〝ベノンザッパー〟で瞬く間に壊滅状態にしてやれる。向こうもそんなことはわかっている筈だ。

しかし、諦める訳でもないようだ。毒と重症を負った仲魔二体で、まだ立ち向かおうとしてくる。

次にナナシが何を仕掛けるか、オセは既に検討をつけていた。ナナシが出来ることといえば、かなり限りてくるからだ。

（次も一斉に攻撃してくる筈だ。それ以外に、私に傷をつける方法が無いからな）

向こうは毒状態である以上、持久戦は賢くないだろう。短期決戦で、尚且つこの私に致命打を与えるにはそれ以外ないだろう。

まさに乾坤一擲、天に運を任せた戦法だ。うまく隙をつければ、私を危機的状況に陥れれるかもしれない。だが

（そうそう上手くいかせんよ）

その戦法を見切っている時点で、向こうがこの私に傷をつけれる可能性は、万の一もない。

そう考え、オセは自身の持つ刀剣を握り直す。今度は〝ベノンザッパー〟みたいなぬるい技は使わない。せめてもの温情として一思いに殺せるよう、自分のなかでの全身全霊を込めた剣技で葬るつもりだ。

するとナナシとその仲魔達はおもむろに走り始める。モウリョウが先頭、ユニコーンがそれに続く。しかし、ナナシはオセとは逆方向に走り、しばらく距離を離してから立ち止まってスマホを操作する。

（また有象無象を召還するつもりか）

短期決戦をあきらめて持久戦に持ち込むのか、と考える。隊列を縦にしてこちらに突っ込めば、全体攻撃の衝撃波は先頭のモウリョウだけにあたり、実質化に不発になってしまう。しかし

（各個撃破に煩う程、私は軟弱ではない）

「ここはぁぁぁ!!!うぉ、うぉれのきょりだぁぁぁ!!!」

身の程をわきまえずに突っ込んでくる目の前のモウリョウに冷ややかな視線を投げかけ、冷静にその霊体を自身の持つ刀剣で切り裂く。

「ちょ、ちょおいてぇぇぇよぉぉぉ!!!」

モウリョウはその剣戟を避けることも受け止めることもかなわず、

霧散していく。
〝ディアラマ〟
「うぉ、うぉれいきてるぅぅぅ!!!」
〝アタック〟
「なに!?」

しかし完全にモウリョウが霧散する前に、何かの魔法が崩れるモウリョウに掛けられ、霧散しかけた体が元の状態に戻る。そのまま、オセはモウリョウの攻撃を受けてしまう。
オセは心の中で舌打ちする。回復魔法を掛けたのだ、おそらくモウリョウの後ろにいるユニコーンが。持久戦に持ち込んだのはこの為か、とオセは感心し、同時に下らないと吐き捨てる。

「うぉ、うぉれ……もぅ、ごぉるしても……いい、よね……」

モウリョウへの回復が追い付いていないのだ。それもそうだろう。モウリョウには毒が付与されている上、ユニコーンから受けている回復魔法の回復量がオセが与えるダメージを下回っているからだ。現に毒とダメージの影響で、モウリョウは錯乱して訳のわからないことを言い出している。
どの道モウリョウは死ぬ定めだ、ならば早いとこ苦しみから解放してやろう。せめてもの情けとして、オセはモウリョウに数え切れない程の剣戟を繰り出す。

「うぉ、うぉれは、さんどばっぐかよぉぉぉ!!!」

ダメージを受けては回復し、ダメージを受けては回復しを何度も何度も繰り返す。モウリョウの反撃はオセに大したダメージを与えられず、モウリョウだけがＨＰを削られる。そして、遂に均衡の破れる時がくる。

「ぐ、ぐぉぉぉ!!」

モウリョウが完全に霧散していく。モウリョウはダメージレースに負けたのだ。ユニコーンの回復も単なる時間稼ぎにしかならず、オセにダメージを負わせる事も、体力を消耗させる事も叶わなかった。

「うお、うおれにもぉぉぉ……。ＩＣＢＭ種をく、くれぇぇぇ……」

モウリョウ　ＨＰ　０／１８０　死亡

そう残してモウリョウは完全に消えてしまう。消えたモウリョウの後ろには、毒のダメージが累積し息も絶え絶えのユニコーンが立っている。

モウリョウが完全にやられたのを見て、ユニコーンは直ぐに後ろへ下がり、その後ろにいるナナシの横に並び立つ。

「……ん？」

ナナシ達の横列をみて、オセは顔をしかめる。ナナシはモウリョウをけしかけてくる間、何かしらの悪魔を召還するとオセは読んでいた。そしてその読み通り、ナナシは仲魔を召還していた。しかし

「ａぁＡ９２まｕ金」

【外道】　スライム　Ｌｖ２

弱点［銃・呪殺以外の属性］

ＨＰ　３５／３５　ＭＰ　３７／３７

物理属性弱点の悪魔をだ。

「……」

不可解極まりない行動だった。スライムの弱点をつかれ、隊列を乱されれば、当然ナナシ達に隙ができる。そうなれば、オセはもう一度攻撃する機会が生まれるからだ。
しかし、オセはある一つの結論に達する。

（ブラフか）

ハッタリだ。ナナシは普通ならばこの場面に、それどころが出せば自分達が不利になる悪魔を召還し、スライムに私の気を逸らせるつもりなのだろうと、オセは当たりをつけた。
スライムがなにか仕掛けてくると注意を逸らされた私に攻撃を仕掛け、そこから潰しにくるのだろう。しかし

（私がスライムなんぞに、いちいち気を向ける訳がないだろう）

注意を逸らされない時点で、その策は失敗だ。哀れだな、とオセは心中でほくそ笑む。
なんとか勝とうと立ち向かうナナシは、しかしその実、敗北に向かって全速力で進んでいるのだ。
もしこの少年がこのミカド湖にこなければ、もしも「あの御方」が殺すつもりで戦えと言わなければ、目の前の少年が死ぬことはなかっただろう。
しかし、そんなもしもの事を考えたところで意味などない。さっさとケリをつけてしまおう。オセはそう考えナナシに向き直る。
目の前の少年からは、依然として燃えるような闘志が見て取れる。その眼は、死を恐れない狂戦士を思わせるほどに爛々と輝き、オセを見つめている。

「……！」

瞬間、ナナシはオセに向かっておもむろに走り始める。左手を突き

出し、右手を振りかぶりながら突進してくる。右手は必要以上に振りかぶっており、握っているはずの剣が体に隠れ、体のバランスが後ろに傾いているほどだ。
　そのナナシに伴う形で、仲魔達が突進してくる。瀕死のユニコーンも、物理弱点のスライムでさえも突っ込んでくる。

（終局か）

　もうこれ以上、ナナシに苦しみを与えるのも、酷というものだろう。せめて、すっぱりと殺してやろう。そうすればナナシは必要以上に苦しまない。

（……そして、前の世界での借りも返せる）

　オセは剣を上段に構える。『冥界破』それがオセの放つ必殺の技。かの『破壊者』と名高い天使、『アバドン』も使う強力無比の物理技だ。全体攻撃の大威力というとてつもない破壊力を有した技は、一撃でナナシのパーティを壊滅させなおお釣りが出るほどだ。その技の有効距離に、死地に、少年は突っ込んでくる。
　一歩、二歩、ナナシは走ってくる。そしてとうとう、有効距離に入ってしまった。逃れられぬ死地に、完全に踏み込んでしまった。
　ナナシもオセの『冥界破』に合わせて、腕を振るってくる。しかしそれももはや意味をなさず、後にも先にも「一人の少年が死んだ」事しか残らない。振り上げた腕を防御に使おうと攻撃に使おうと、オセの放つ暴力の前では、なんの効果もないからだ。
　防御に使えば防御した腕ごと崩し、攻撃に使えば振るった腕ごと壊す、誰からどう見ても、ナナシの詰みだった。

「さらばだ弱き者」

　オセはそれだけ言い、剣を抜き放ち、技を繰り出す。技は強烈な衝

撃はを生み出し、腕を振りかぶっているナナシたちへ襲い掛かる。

（……？）

そこでオセは固まった。オセの目の前にいるナナシは、今にも腕を振り下ろそうとしている。振り下ろそうとする努力むなしく、もうすぐでナナシと『冥界破』が衝突し、ナナシこま切れとなって死亡するだろう。

……いや、ほんのすこしだけ言葉足らずだった。

正確には、「腕だけ」を振り下ろそうとしていた。

（!?）

どういうつもりだ。ナナシは剣を握っていなかった。オセは握りこぶしを振り下ろしている事実に戸惑う。しかし、それも一瞬のことだ。なぜなら、すでに最強の一撃は放たれ、ナナシに衝突しようとしている。今更なにをしようと、もう遅い。自分の勝ちは揺るがない。オセは確信した。

確信して、気づいた。オセとナナシの距離がある程度近くなっていたので、気づけた。気づいてしまった。

ナナシ達の体から、薄い茶色の反射光が出ていることに。

（ま、まずい!!あれは、あの技は!!）

焦るオセの目の前で、ナナシは握りこぶしを開いていく。その手のひらに、とても小さい人が乗っている。その体は蓮の葉で包まれ、後

光が指している。その小人にも、衝撃は襲い掛かる。襲い掛かってしまう。

そして

〝テトラカーン〟

カイーンッという小気味のいい音と共に、ナナシ達に放った『冥界破』の衝撃が、オセへ方向転換する。すべてを破壊する暴力が、自分のもとへ戻っていく。

（負け……だ）

自身の放つ渾身の一撃にほかでもない自分が滅ぼされる未来の光景を予見し、オセは確信してしまった。もう勝てないということを。自分はここで消えてしまうのだと。

（また負けるのか、私は）

あの忌まわしい神の力がなくなり、ナナシは前よりずいぶんと弱くなってしまった。そして、油断した。だから、最後の最後まで〝テトラカーン〟を見抜けなかった。考えが足りなかった。

結局、「あの御方」のいう通りだった。「殺す気で戦え。でないと、手痛いしっぺ返しを受ける」そう忠告されたというのに、自分は最後まで目の前の少年を甘く見、殺されてしまうのだ。

オセはふと、ナナシと初めて出会った神田の社の出来事を思い出した。

あの時から、只者ではないということはわかっていた。神の力を振るい、仲魔を自由自在に操る姿は、脅威を感じさせられた。その脅威が再び目の前に現れ、もう一度その脅威に殺される。もはや目の前の非力な少年は少年ではなく、あの時の脅威へと姿をかえていたのだ。

そんな僅かなオセの思考を長くは続かず、『冥界破』の衝撃はかなりの速さでオセへと進み、目と鼻の先まで来てしまった。

（閣下）

オセはせめて、最後の独白を紡ごうとする。

（あいつは、あの人間は）

生かしてはダメです。その負け惜しみともとれる独白は形を成す前に、オセの消滅と伴い、意味をなくしたのであった。

◇

十六夜達はひたすら東北東を進んでいた。どこぞの知人のせいで面倒な目に遭ったが、だからといって放っておくわけにはいかないからだ。

ナナシの目撃証言のあった方向にただひたすらに進んでいくと、遠目にとても雄大な湖が広がっていることに、十六夜と黒ウサギは気づいた。

「ここが東北東の果てらしいな」

「えぇ。このミカド湖は、東北東の目印となる有名な湖で、かの有名なコミュニティ「ゴエティア」の魔王が……って、ん!?」

そんな十六夜達の視界の端に、見覚えのある顔が映った。湖のほとりでゆうゆうと寝転びながら、心地良さそうに昼寝をしているあのソフトモヒカン野郎こそ、まさに散々人様に迷惑をかけまくり、今まで

十六夜達が探し回っていたナナシその人ではないか。

「こっちはあたふたしてたのに当の本人がこの体たらくとはどういうことでやがりますかぁー!!」

すやすやと寝息までご丁寧にかいているナナシに向かって、黒ウサギはハリセンで叩きにかかる。

しかし、あたる直前でナナシはパッチリと目を覚まし、ハリセンをローリングで交わした。

避けられたことに黒ウサギが憤慨し何度もハリセンを振るうが、その度に避けられ、次第に黒ウサギも無駄だと理解し、ため息をつきながらハリセンをしまう。

ちなみに起きたばかりのナナシは不機嫌そうに目をしたたかせている。基本的にナナシは寝起きは不機嫌になる男だった。

「まったく、心配したんですからねナナシさん！しかもよりによって『オセ』が守護する湖で昼寝かまして！『オセ』が今は居なかったからよかったものの、もしいたら半殺しにされてましたよ！」

そのオセが居ないのは自分が倒したからだ、と説明しようとして、やめる。いったら余計面倒なことになると踏んだからだ。

「ま、黒ウサギもそのへんにしとけよ。おめぇだって人の事を言えない程に、わがまま極まりないことをしてんだからよ」

「うっ……。と、とにかく！その話をするためにも、二人には箱庭に入っていただく必要があります！ですからお二人には来ていただきますよ拒否権はございません!!」

「……」

「不服そうな顔をしてもダメなものはダメです!!」

このあと箱庭の果てにそってマッピングしようとしたナナシは、黒

ウサギの言葉に難色を示さずにはいられなかった。せっかく昼寝をしてマッピングの為に英気を養っていたというのに、これでは何のために昼寝をしたというのか。

「ヤハハ!!ナナシ、まぁ今はこいつの言う通りにしようぜ。どうせ箱庭の外に出る機会は今後、腐るほどあるだろうし!」

「なにもう一度箱庭の外へいくぜ宣言してんですかあなたわぁー!」

十六夜に黒ウサギはハリセンでぶっ叩きながらツッコミをいれる。傍からみたら完全に漫才のそれにナナシは箱庭の外をマッピングをする気概を萎えさせられる。

どのみち抵抗しても許してくれないのは目に見えている。だから黒ウサギに何も言わずにマッピングしたのだ。箱庭の外をマッピングするのは一旦諦めよう。ナナシはそう考え

かわりに箱庭の中をマッピングしようと、懲りずにマッピングしようとするのだった。

第四話「元魔王」

「はぁぁぁ!!?あの短時間に〝フォレス・ガロ〟のリーダーと接触してそのままギフトゲームを挑んだですって!!」「しかも敵のテリトリーで戦う上に、明日がギフトゲーム開催日ってどういうことですか!!」「ジン坊っちゃんも!!何でそんなギフトゲームを許可したのですか!!」「一体全体どういうおつもりですか!!」「ちょっと、聞いてますかお三方!!」

「「ムシャクシャしてやった。反省はしない」」

「だまらっしゃい!!なぁぁんてことしでかしてくださったんですかぁぁぁ!!」

黒ウサギの怒号がコミュニティ全体を震わせる。

それも仕方ないだろう。十六夜とナナシ捜索を無事終えてコミュニティに戻った黒ウサギを待っていたのは、問題児の女子二人が勝手にコミュニティ〝フォレス・ガロ〟へ喧嘩を売ってしまったという、事後報告だったのだから。

◇

コミュニティに戻る道すがら、黒ウサギは十六夜にも話した黒ウサギのコミュニティの実状をナナシに包み隠さず話した。

コミュニティが魔王との「ギフトゲーム」に負けてメチャクチャにされてしまった事、

コミュニティのかつての名前すら奪われコミュニティの名前を名乗る事すら出来ない事、

今の「ノーネーム」となったこのコミュニティでまたかつての仲間たちと過ごしたい事、

それらすべてをナナシに包み隠さず伝えた。

正直黒ウサギは、ナナシがこれらの話を聞いて、再びコミュニティの招待を受けてくれるとはおもえなかった。そして黒ウサギ自身を

許してくれるとも思えなかった。今度は額に銃弾をぶち込まれるとすら、思った。

しかしナナシはその話を聞いた上で、再び黒ウサギに握手を求めた。「協力する」と、無口で無表情な彼なりに伝えてくれたのだ。その不器用な優しさが黒ウサギには嬉しく、思わず感涙しながらナナシに抱き着いてしまったほどだ。

しかも、それだけではない。嬉しい心持のままコミュニティに戻ると、ジンの坊ちゃんが「黒ウサギ、やったよ！耀さんも飛鳥さんも、僕たちのコミュニティ復興を手伝ってくれるって!!」と願ってもやまない朗報を伝えられたのだ。

「この世界ではこれくらいのハンデがあった方が、やりがいがあって面白いもの」

「友達の飛鳥が黒ウサギのコミュニティに入るなら、私も入るよ」

なんとも単純な理由だと思ったが、それでいてこの二人らしいとも黒ウサギは思った。出会って数時間しかたっていないというのに「この二人らしい」というのは何とも奇妙に思えるが、そう感じたのだ。

このコミュニティから去っていくと思われた四人が、実状を知った上で入会してくれることは黒ウサギにとって信じがたいことでもあり、同時に喜ばしいことだった。

しかも四人のうち二人の実力は折り紙つきで、飛鳥と耀の二人もまた人間以上の力を有している雰囲気を感じ取れる。

この四人がコミュニティに入るなら、コミュニティ再建も夢じゃないと、黒ウサギは確信した。かつて失った仲間達や名前も、取り返せると思えた。ただ

「あ、そうそう黒ウサギ。あなたが十六夜君達と鬼ごっこしてる間に、あたしと耀で明日〝フォレス・ガロ〟とギフトゲームすることになったから。当日の〝フォレス・ガロ〟コミュニティまでの道案内は宜しくね、そこでギフトゲームをすることになってるの」

「別段こちらに利益は出ないけど、あのリーダーのガルドって悪人をぶっ倒しときたいから、良いよね。黒ウサギのコミュニティに迷惑をかけるわけじゃないし」
「……え？」

コミュニティ再建以上の心労がこの先待っているとも、思い知らされるのだった。
そして、場面は冒頭に戻る。

◇

「しかも二人だけで戦いたいってどういうつもりですかぁ!!せっかく頼もしい殿方二人がおられるのに!!ナメプ!?さてはナメプですかぁぁぁ!!!」

怒鳴る黒ウサギの心には、もはや先ほどまでの嬉しさや感動はすっぽりと抜けてしまった。
勘違いしないでほしいが、黒ウサギは問題児の四人には感謝している。この四人がもしもコミュニティに入らなかったら、その時点でコミュニティ再建の目標は潰えていたし、そのうえこの四人はコミュニティの再建を手伝ってくれるとも約束してくれたのだ。
この四人には感謝してもしたりないぐらいだ。時間に余裕ができたらお礼をしようと、密かに考えてもいる。
だがそれとこれとは話が別だ。（大激怒）

「まぁまぁ良いじゃねぇか。あいつらも、見境なく喧嘩を売ってるわけじゃねぇし良いだろ、もう」
「そりゃ、龍神に喧嘩を売った十六夜さんや森の魔物を全滅させたナ

ナシさんと比べたら遥かにマシですけど……」

怒り続ける黒ウサギを十六夜はヤハハと笑いながらなだめる。十六夜の言葉で黒ウサギは幾分か落ち着きを見せるが、それでも不服そうな顔は治らない。

ナナシはというと、そんな黒ウサギ達の喧騒から少し離れた所でスマホをいじっては、何か思案している。まさに我関せずの態度である。

（……いくら説教してもギフトゲームが無くなるわけじゃないですし、説教はやめて建設的な思考に切り替えましょうか）

自身の不満をぶちまけ多少気分が晴れたので、今度は明日のギフトゲームの準備をしようと、黒ウサギは思考を切り替える。

それに説教をしたところで、問題児組は全くこたえないのだから、無駄に説教するよりも明日の準備をした方が遥かにマシだ。

「まぁ、分かりました。ガルドの悪逆非道ぶりは、月の兎である黒ウサギにとっても見逃せない案件です。ジン坊っちゃんもガルドが正当に裁かれるべきだと思って、ギフトゲームを申し込んだのでしょうし」

ガルドの悪逆非道ぶり、それはコミュニティの子供達を誘拐しては恐喝し、最終的に子供達を殺害するというものだ。

ガルドはギフトゲームで周囲のコミュニティ自体を略奪するため、略奪したいコミュニティに属する子供たちを誘拐し、「コミュニティを賭けたギフトゲームをしろ」と恐喝していたのだ。脅されたコミュニティはその要求を呑まざるを得なくなり、結果コミュニティを奪われていく。それを繰り返し、ガルドは次々とコミュニティを略奪していき、かなりの力を有するようになったのだった。しかも誘拐した子供はうるさいから殺すというサイコパス顔負けの畜生という始末で

ある。
今までガルド自身が口にしたこともない事実を、飛鳥はガルドに「自身の能力で」喋らせるという方法を用いて暴いたそうだ。
その卑劣な手に怒り心頭となった三人は「参加者が敗北した場合、主催者の罪は黙認される。しかし参加者が勝利した場合、主催者は主催者の言及した罪をすべて認めたうえで正式に裁きを下された後、コミュニティを解散する」という賞品内容でギフトゲームを申し込んだのだ。

「しかし、なんの準備もせずに相手のコミュニティで戦うのはあまりにも下策です。ですので、〝サウザンド・アイズ〟で皆さんのギフト鑑定をしましょう！」
「〝サウザンド・アイズ〟？それってコミュニティの名前かしら？」
「ＹＥＳ！上層下層のすべてに精通する超巨大商業コミュニティの名称です！ギフト鑑定も承っているコミュニティなんですよ。ギフトを鑑定することで本来の力の使い方がわかったり、力の根源がわかったりするのデス」

一刻も早くガルドを裁くためにこのギフトゲームを申し込むのは、黒ウサギとしてもやぶさかではない。しかし、一先ずは準備をしてからの話だ。いくら飛鳥達が強くても、ガルドもコミュニティを賭けている以上、死にもの狂いで抵抗するだろう。準備はしておいたほうが良い。
ギフトを鑑定するという言葉に十六夜に飛鳥、耀は難色を示すが、反対の声は特に上がらない。ちなみにナナシは何か思案したままで黒ウサギの話を聞いていない。いついかなる時でもこの人はぶれないな、と黒ウサギは若干呆れるが、呆れたところで仕方がないと考え直す。
「というわけで、早速〝サウザンド・アイズ〟に出発デス！ほら、ナナシさんもボーっとしてないで行きますよ!!」

黒ウサギに声を掛けられて、そこでナナシは自分が呼ばれていると気づく。何だと顔を向ける、と同時に腕を黒ウサギにずるずると引っ張られる。

「どうせ話を聞いてなかったんでしょう!!あとで説明しますから、とにかくついて来てください!!」

結局ナナシは腕を引かれながら、有無を言わさず〝サウザンド・アイズ〟へと連れていかれることになった。

◇

「……」

〝テトラカーン〟はオセの放った衝撃波を全て跳ね返し、オセの身を消滅させた。

モウリョウを突撃させたあの時、ナナシはスマホで「悪魔合体」を行っていた。

悪魔同士を合体させることで、より強い悪魔を作り出すというアプリの案内役、《ミドー》の言葉を思いだし、手持ちにオセを倒せない仲魔が居ないのなら、創ればいいと考えたのだ。

しかし死んだケンタウロスとスダマを合体材料に合体素材にしても、Ｌｖ７の《ペレ》しか創れなかった。そこで、ナナシは賭けにでることにした。

ミドー曰く、悪魔合体はかなり低い確率でだが『合体事故』を起こ

すことがあるらしい。死んだ悪魔を材料にしたり、満月の日に合体したりすると、その『合体事故』が起こりやすいらしい。
そして、その合体事故では予定とは違う悪魔が、悪魔合体で産まれてしまうのだそうだ。
これを利用しナナシは、意図的に合体事故を起こしてオセを倒せる悪魔を創ろうとしたのだ。
しかし合体事故が起きる確率は低く、更には起こせたとしてもオセを倒せる悪魔が産まれるかどうか分からない為、それはあまりにも分が悪い賭けだった。
しかしその賭けは、ナナシの完全勝利で終わることになる。
ナナシは意図通り合体事故を起こし、物理攻撃を反射する〝テトラカーン〟を持っている【神樹】「ククノチ」を、合体で作り出せたのだ。
そして〝テトラカーン〟の反射ダメージを増やすため、ユニコーンのいた森で仲魔にした物理弱点のスライムを召還し、モウリョウが凌いでいる間にテトラカーンを唱えさせ、〝テトラカーン〟を唱えた事がバレないようにあたかも剣を振りかぶってるかのように構えて、小人「ククノチ」の入った右手を隠し突撃した。
目論見通り、オセはテトラカーンに全体攻撃を反射され、マグネタイトに霧散する。
苦しい戦いだったが、ナナシはなんとか勝ったのだ。だが――――

「勝ったんだね。一先ず、おめでとうと言わせてもらおう」

「……！」

――――安心するには早かった。
オセを倒し一息ついた瞬間、霧散していくオセのマグネタイトの後ろから、二十代程の若い男が拍手をしながら現れたのだ。
金髪で赤と青のオッドアイズ、黒いタキシードに身を包んだ男は、悠然とオセのマグネタイトに近づいていく。

「オセも、だらしなくなったものだな。『奴』が居なくとも十二分に強い相手だと伝えたというのに……」

そう言いながら、男はマグネタイトに手をかざす。

〝サマリカーム〟

その瞬間、霧散していたマグネタイトは時間を巻き戻されたかのように元の場所に戻って行き、やがてオセの肉体を形成してしまう。

「！」

しまった新手だったかと、ナナシは歯噛みする。しかもあれほど苦労して倒したオセが、魔法か何かで一瞬で蘇生されてしまった。これでは今度こそ殺されると、ナナシは先手必勝とばかりに破れかぶれの突撃をかけようとする。

「おっと」

「！」

しかし、渾身の力を込めた剣の一撃は男の素手に止められる。しかも剣の刃を、片手だけで握りこむようにだ。

「驚かせてすまない。だけど、今はとにかく話を聞いてほしいんだ。」

「……」

剣を握ったまま、男は不敵に笑う。男から敵意は感じられず、剣も握ったままでそこから何かをしようとする意思も無さそうに思える。しかし、こちらが反抗すればそれなりの態度をとるつもりだということも、ナナシはわかった。

「……」

デビルアナライズを起動しなくてもナナシには、男と自分との歴然たる実力差が分かる。自然体である今の状態ででも、向こうの方が実力が遥かに上だ。この男と戦おうものなら、一瞬で自分は肉片にされてしまうだろう。

下手に動いてせっかくの命を投げ捨ててしまっては元も子もないと思い、ナナシは剣に入れている力を抜き、鞘に納刀する。

「言うことを聞いてくれて、助かるよ。これで話を進められる」

一呼吸おいて、男は自己紹介を始める。

「久しぶり……いや、「ここでは初めまして」かな。私の名は、『ルイ・サイファー』。コミュニティ、『ゴエティア』の統率者だ。ようは君が戦って〝勝った〟、オセの上司だね。」

「……」

男、ルイ・サイファーの斜め後ろに立つオセがその自己紹介を聞いて、少し顔をしかめる。ナナシに負け、自分の上司にそれを咎められた事が、相当堪えているらしい。しかし、そんな相手の事情はどうでもいい。それよりも、重要な事がある。

「『ここでは初めまして』……その意味が、そんなに気になるかい」

「……」

まるでこちらの考えなど見透しているかのように、自分の気になっている事を言い当てられる。その不敵さが不気味で、質問するのをナナシは一瞬躊躇うが、直ぐに首を縦に振る。

それを見てルイ・サイファーは口角をつり上げる。

「だろうね。自分の過去の記憶を知りたい君にとって、誰だろうと自分の記憶を知っている人物がいれば、直ぐにでも聞きたいだろうし、

しかも『ここでは』なんて言われると、一体自分の身に何があったのか気になるはずだしね」
「……！」

もしやと思ったが、やはりこの男はスティーブンと同様に、自分には昔の記憶が無いことを知っている。

「知りたいかい？昔の自分のことを」

ルイ・サイファーが優しい声色で、そう話しかけてくる。昔の自分の記憶を知る事、それは記憶を失ったナナシが最も望んでいたものだ。

昔の自分が人道から外れた人格をしていても、自分の過去が重く苦しいものでも、今のナナシにとってそれは些細な問題だ。

今は何よりも自分という人格を確定したいのだ。その為にも、ナナシには昔の記憶は必要不可欠なのだ。

そうだ、知りたい。教えてくれと、ナナシは頷き意思を印す。

頷くナナシを見て、ルイ・サイファーは笑みを浮かべる。均整な顔立ちが浮かべる不敵な微笑みはより一層深いシワを作り、赤と青の瞳は妖しい光を携え始める。

「そうか。ナナシくん、期待させて申し訳ないが、昔の君の事を教えることは出来ない」

何だと、とナナシはルイ・サイファーを睨み付ける。その瞳は、知っていると言っておいて勿体ぶるのか、と非難と怒りの念を露にしている。

「勿体ぶる訳じゃ無いんだ。言っただろう、教えないんじゃない、教える事が出来ないんだ。君の事を思えば、今は教えることは出来ない。でも、そう言っても君は納得出来ないだろう。だから」

スッとルイはナナシに歩を進め、ナナシの耳に顔を近づける。

「特別だ、ヒントを上げよう」

「君は、記憶を無くしたんじゃない。記憶を消されたんだ」

耳打ちで言われた言葉に、ナナシは戸惑う。その言葉は小声ではあったが、ナナシの鼓膜を確かに揺らし、また聞き間違いということもなかった。ルイははっきりと――

「その犯人は、この箱庭にいる」

――陰謀の断片をナナシに告げた。

人為的に記憶を消されたという、ルイの言葉の真偽は分からない。しかしルイのその発言は、裏で自分の記憶喪失の糸を引いている人物がいるという可能性を、ナナシに指し記した。

その話が本当だとして誰がその犯人なのか、そして何の為にそんなことをしたのか聞き出そうと、ナナシはルイに詰め寄ろうとする。

「さぁ、ヒントはこれでおしまいだ。次はオセのギフトゲームに勝利した景品として〝チップ〟を渡そう」

しかしナナシが詰め寄ろうとするする前に、ルイは「これ以上は言わない」とばかりに話を強引に変えてきた。ルイの態度からして、本当に話すつもりがないのだとナナシは考え、素直にルイの言う〝チップ〟の話に耳を傾けることにする。

「いやはや、人間の力でオセに勝ってしまうとは恐れ入ったよ。難易度も高かったぶん、〝チップ〟も豪華にしておこう」

そう言うとルイは自身の右手をナナシに向ける。突然何をしているのだろうとナナシは不思議にルイの姿を見ていたが、次の瞬間にナナシのスマホの画面から「データ受信中」の文字が浮かびＳＥが鳴る。

なんだ、と思いナナシはスマホの受信データをすぐさま確認する。

「……！」

そして、驚く。チップの内容とは、悪魔のデータとその悪魔の権利書だった。それもナナシが扱いあぐねるほど強力な力を宿した、その恐ろしさを身に染みるほど味わった悪魔が。だが、その悪魔も今は自分の味方だと思うと、ナナシに言い様のない安心と自信を感じさせた。

「プレゼントは、どうらや君の琴線に触れれたようだね。良かったよ」

確かに、このチップは自分が想像していたものよりも遥かに価値が高く、そして有用な物だった。しかし同時にこのチップは、「男の目的」が何なのかとナナシをより混乱させた。

急にナナシに自分の部下をけしかけ、それが失敗したら「おめでとう」と言い、あまりにも有用で高価なチップを渡してくる。目の前の男、ルイ・サイファーの言動は、支離滅裂と言っていいほどに一貫性がなかった。

殺しに来たわけでもなく、プレゼントを渡しに来た訳でもなく、ただ単にナナシに〝ギフトゲーム〟を挑戦しに来たのではとすら思える。

そんなナナシが疑念に囚われているところを余所に、男はオセに近より声をかけていた。

「閣下……申し訳、ございません。貴方のご忠告を無視し、こんな無様な結果を残してしまい……」
「気にしなくていい。今回はどっちでもよかったんだ。君はよくやってくれた。それより、オセ。これから君は忙しくなるぞ」
「はい。今度こそ、閣下のご期待に答えてみせます」
「ふふふ、その調子だ。じゃあ私はこれで失礼しよう。また会おうじゃないか、『ナナシ君』」

なんの話をしているのかは分からなかったが、恐らくろくでもないような事を二人で話し合い、そして忽然と去っていく。
二人とも何処かに瞬間移動でもしたのかと思えるほど跡形もなく、立ち去っていった。

「……」

余りにも、色々なことが先の数分で起きすぎた。マップ埋めをしながら悪魔召還をしてたら悪魔に襲われ、なんとか苦心しながら倒したら胡散臭い男が妙に豪華なプレゼントを渡しに来て、自分の記憶は人為的に消されたと告げられる。
正直、密度が濃すぎる。そのせいで身体的にもそうだが、主に精神的な疲労が凄まじく、立っているだけでやっとだ。
せめてケンタウロスに自分の過去を教えてもらってから、湖のほとりで寝ようとスマホをいじると、途中でそのケンタウロスを合体材料にしてしまったことに気付いた。
しょうがないので戦ってくれた仲魔たちをねぎらい帰還させたあと、ナナシはほとりの草原に寝そべって目をつぶる。
目が覚めたら、またマップ埋め作業に戻ろうと考えながら。

◇

「あ、見えました！あれがサウザンド・アイズの東の支部店です！」

しばらく雑談を交わしながら川沿いの道を進んでいくと、向かい合う女神像がモチーフになっているコミュニティの旗が掲げられた、少し小さめ売店のような小屋が遠目に見える。

しかし同時に、その店の出入口付近では店の売り子と思わしき人物が店仕舞いの支度をしているところだった。

「その閉店ちょっと待っ……！」

「それはなりません。今日の業務は終了しました。また明日お越しください」

「そ、そんなぁ……」

閉店前に黒ウサギは駆け込むも、努力むなしく店員から突っぱねられてしまう。

「まだ閉店時間まで五分はあるってぇのに、商売っ気のない店だな」

「そうですよ！まだ閉店時間まで時間があるなら、私たちがお店を利用したって良いでしょうに！」

十六夜のぼやきに便乗する形で黒ウサギも店のことを批判し始める。

しかし向こうが売り手である異常、買い手であるこちらがどうこう言っても仕方がない。向こうが閉店だと言って店を閉めるのなら、引き下がるべきなのはこちらだ。

黒ウサギにいまだ握られている手とは反対の手で、黒ウサギ達に制止するように伝える。ここでもめても、黒ウサギのコミュニティの品が疑われるだけだ。

ちなみに手は黒ウサギから「手を離したらまた何処かに行くでしょう」と言われ依然離してくれない。

「うぅ……。しかしですねぇ、ギフトゲームが明日始まる以上、何としてでも今日中にギフトの鑑定は済ませたいところなんです……。ギフトの鑑定、つまりは自分の能力の本質を知ることは、とても重要な事ですから……」

そう言うのなら、仕方ない。

ナナシはホルスターの留め具を片手で外し、銃を握る。明日のためにも、こちらの無理をこの店に通してもう必要がある。

ならばさっさとこの店員の女を脅してギフトの鑑定とやらを済ませてしまおう。黒ウサギは何としてでも今日中に鑑定してもらいたいようだから。

「あ”ー!あ”ー!私ちょっと今はギフトゲームを鑑定してもらう気分じゃないですー!!また今度にしたい気分ですー!!だからナナシさんちょっと落ち着きましょうねぇ!?」

銃を握り脅そうとし始めるナナシの様子を見て、黒ウサギは慌てながら前言を撤回する。

分かれば良いのだ、分かれば。買い手も売り手もどちらも立場が同じである以上、どちらがが無理を言えば関係は悪くなってしまう。今

回の件で〝サウザンド・アイズ〟と関係が悪くなっては、今後の活動に影響がでるだろう。だとしたら、余り無理を言うべきではない。
今回は少しばかり運がなかっただけだ、また今度鑑定してもらえば良いだろう。
黒ウサギを諭すためとは言え少し乱暴な手を使ったが、どうやら正解だったようだ。他の三人からは「またか」と冷ややかな目でみられているが。

「はぁ……。じゃあ、帰りましょうか皆さん」

肩を落とし悲しそうな声音で黒ウサギは店に背を向けて歩き出す。
いい加減この手を離してほしいと思いながらナナシも黒ウサギと共に歩き出した、その時だった。

「イヤッッホォォォォォォォウ!!!黒ウサギィッ!!会いたかったぞおぉ!!」
「へっ!?ちょっうわあぁ!!?」

いきなり変な奇声と共に、着物を着た銀髪の幼い女の子が黒ウサギの横っ腹に体当たりをかましてきたのだ。
そして体当たりの勢いを殺しきれず、黒ウサギと銀髪の幼女は仲良く二人で後ろの川に入水する。

「白夜叉様！な、なんでこんなところに居るんですかぁ!?」
「そりゃあ、お主に会いたいからに決まっておろう！わざわざ本部からここまですっ飛んできた甲斐があったわい!!相変わらず幼い容姿の癖に発育の良いからだをしおって!!ほれほれここがええんかここがええんか!!」
「白夜叉様!?ちょっと、まずいですよ!!」

入水しても尚白夜叉と呼ばれる幼女は黒ウサギに抱きつき、胸やら腹やら足やら黒ウサギの肢体の隅々をくまなくそして舐めるように、愛撫もといセクハラをしていく。

「おい、この店はサプライズサービスであんなことをしてくれるのか？」

「しません」

「じゃあ金を払えば」

「絶対しません」

何故か十六夜が女性店員に大真面目な顔をして詰めよっている。

「ホレホレホレ！嬉しいダルルォ？黒ウサギィッ！」

「あーもうっ！いい加減にしてください白夜叉様!!」

何とか黒ウサギは体に張り付いてきた白夜叉をひっぺがし、その小さな体を勢いよく投げ飛ばす。その投げ飛ばした先には十六夜がおり、自分に向かって飛んでくる白夜叉を確認すると。

「ほい」

「ぐぅえっ！」

白夜叉の背中を蹴って受け止めた。受け止められた白夜叉はカエルが潰されたような声を出し、痛む背中に手をやって膝をつく。

「も、もうちょっとだけでもレディに優しくできなんだのか……？物凄く腰に堪えたのじゃが……」

「へっこの十六夜様に優しさなんて期待しない方がいいぜ」

白夜叉の非難の念のこもった言葉を十六夜は軽く受け流し、ヤハハ

と彼特有の軽薄な笑みを浮かべる。

「まったく……。いつもの事とは言えいきなり抱きつかないで下さいよ白夜叉様……」

びしょ濡れになりながらも、黒ウサギは川から上がる。上がると同時に――

「……あれ？」

――ナナシの姿が無いことに気付いた。

周囲を見やるがあの特徴的なソフトモヒカンは見当たらず、先程まで一緒にいたはずなのにどうしたのかと黒ウサギは不安になる。

「あれ？皆さん、ナナシさん何処に行かれたか知りません？」

もしやまたマッピングなるものをしているのではないか、またもナナシと迷子になったのではないかと黒ウサギが呆れていると。

バシャバシャと、先程上がった後ろの川から水が跳ねる音が聞こえた。

「……あ」

そこで、黒ウサギは思い出す。そういえば、ナナシがまた迷子にならないよう、他でもない自分がナナシの手を握っていたことを。

そして、握っていた自分は先程川に入水していたことを。

「……ま、まさか」

ゆっくりと、黒ウサギはまるで錆びた機械が無理矢理動くかのようにぎこちなく首を後ろに向ける。

決して見たくはない、見たくは無いが見るしかない。なけなしの勇気を振り絞り、後ろを見た。

「……」

瞬間、黒ウサギは思わず背を向けて逃げ出したくなった。仕方ないだろう。そこにはギラついた目でこちらを見るびしょ濡れのナナシがユニコーンに跨がり、川の中央で居座っていたのだから。

ナナシは依然として無表情だ。しかし、無表情の顔の奥ではメラメラと音をたてていると錯覚するほどに、憤怒の情念が渦巻いていることが察せれる。しかも濡れているはずのソフトモヒカンが、その強すぎる情念のせいでか、逆立っている。

なにせ黒ウサギのとばっちりでナナシは川にダイブするはめになったのだ、怒りもするだろう。

「全く、また呼び出すから何事かと思ったら、こんな浅い川で溺れそうになっていたとは……。何処か抜けているな、我が主人は」

ユニコーンが誰に話しかけるでもなく、そう一人ごちる。

「ナナシさん泳ぐの苦手なんですね」だとか、「ナナシさんいつの間にユニコーンさんの主人になったんですか」だとか、目の前のナナシに雑談をする余裕は黒ウサギには無かった。

「え、えーと……」

ナナシは依然ユニコーンに跨がりながら、ギラついた目でこちらを見ている。

「その、ごめんな、さい……。私の不注意で、その、ナナシさんをびしょ濡れにして」

一先ず、黒ウサギはナナシに謝ることにした。確かに酷いことをしたが、元はと言えばこの「元魔王」のせいで起きたことだし、素直に謝れば許してくれるかもしれないと思ったからだ。
コミュニティ勧誘の時も本当の事を言って素直に謝ったら、存外あっさり許してくれていたし、何とかなるだろうと黒ウサギは高をくくっていた。
その黒ウサギの目の前で、ナナシが親指を立てて所謂「グッド」のポーズをする。
「良かった、許してくれた」と黒ウサギは一息つくと
その瞬間、目の前でナナシは立てた親指を下に向ける。
「……」
所謂「有罪」のポーズだった。

◇

「いふぁい、いふぁいでふナナシふぁん……」

その後ナナシが黒ウサギに全力で両頬つねりを敢行したり、耀がナナシのユニコーンに「本物!?本物なの!?」とやたら興奮していたり、飛鳥に十六夜、白夜叉の三人はナナシに頬をつねられる黒ウサギをからかって遊んだりとひとしきり騒いだあと、白夜叉の部屋に上がることになった。

ちなみに黒ウサギはナナシの持ち前の怪力でつねられたせいで、頬はリンゴのように真っ赤に膨れ上がってしまっている。

「用があるなら私の部屋で聞こう。あいにく店は閉店しておるからな」

そう言って連れてこられたのは、〝サウザンド・アイズ〟の店の一室だった。

「先ずは改めて自己紹介しようかの。私は四桁の門、三三四五外門に本拠地を構える〝サウザンド・アイズ〟の幹部の一人、白夜叉だ。さて、おんしら。顔を見るに黒ウサギにこの箱庭に呼び出された新参者ということで相違ないな?」

「ええ、その認識であってるわ」

「飛鳥と同じ」

「右に同じだ」

「……」

ナナシは頷き他の三人は「そうだ」と答えてみせる。ナナシは先程の『ルイ・サイファー』の件もあったため本当に黒ウサギに呼ばれたかどうかは怪しいが、ここで否定しても話が進まない上に面倒なことになりかねないので、ここは肯定しておく。

「そうか、ならばおんしらはこの箱庭の事をより深く知っておいた方がいいだろう」

そう言って白夜叉は手近な所から紙を取りだし、大きな円を何重にも重ねた絵を描く。

「バウムクーヘン？」

「玉ねぎ？」

「キャベツ？」

いや、これは卵だろう。殻と白身と黄身を閉じ込めているようにみえる。

「面白い表現をするのぅ、お主らは。まぁ、この場合はバウムクーヘンの方が近いかの」

そう言って、白夜叉はそのバウムクーヘンを鉛筆で書いて、箱庭の構造について説明する。

「箱庭には幾重にも建てられた円形の外壁があり、この箱庭の中心に近づけば近づくほど、そして階層の数字が低くなり同時に強大な力を持つ者たちが多く住んでいる」

「へぇ、そんじゃあ俺たちが今いる区画はこの地図で言う一番右端らへんか」

「うむ、そうじゃな。そして、私が構えてる本拠地はだいたいこのへんかの」

巨大商業コミュニティの幹部というだけあって、実力者であるということが容易に想像できる。現に白夜叉は重なるバウムクーヘンの中心近くに円を書き記し、中心近くに住んでいると語っている。

「結構中心に近いっつーことは、つまりあんたはそれだけ強いってことだな？白夜叉」

「ふふん、もちろんだとも！何せ私は東の〝階層支配者〟なのだぞ？この東側では並び立つことのない、強大な力を有した〝主催者〟なのだ！」

中心部に住んでいると聞いた十六夜は、白夜叉にそう問いかけて好戦的な笑みを浮かべる。それを見た白夜叉もその笑みを見てその気にでもなったのか、十六夜にふっかける。

「へぇ、コミュニティ再建の手間が省けたぜ。あんたを倒せば、晴れて俺たちが今度は東側の最強になるわけだ。景気の良い話だ！」

「そうね、ここであなたにギフトゲームに挑戦して勝てたら、私たちのコミュニティは名のあるものになるもの。太っ腹だわ」

「やるしかないよ、うん」

「ちょちょちょ、皆さん!?何を言ってらっしゃるんですか!?」

白夜叉のふっかけた言葉でナナシ以外の三人は戦闘態勢をとり、白夜叉に剥き出しの敵意を向ける。

対する白夜叉も「ほっほっほ！若いというのはええもんじゃな！」と笑い、敵意を向ける十六夜達に更に挑発をする。そしてその挑発で十六夜達の敵意が増し、一室は一触即発の雰囲気で満たされる。

せっかく白夜叉の計らいで要件を聞いてくれることになったのに何をやってるんですか!と黒ウサギが咎めるも、当の三人はどこ吹く風だ。

「うむうむ、無謀なことに突っ込んでいくのは若さのなせる業じゃな。よきかなよきかな」

「ちょっと白夜叉様!?おふざけが過ぎますよ、〝階層支配者〟であるあなたがこんな……」

「まぁ、黒ウサギは見ておれ。……では、もう一度名乗ろう。我が名は〝白き――〟」

黒ウサギのたしなめる言葉を流して白夜叉が懐を探り、〝サウザンド・アイズ〟の紋章が書かれたカードを取りだそうとした時だった。

「……」

「うん?どうした、そなた。先程から黙りこくっておったのに、急に我らの間に割って入って」

ナナシが四人の間に割って入っていったのだ。そして十六夜達の三人を手で制して、首をふる。「止めておけ」と伝えたのだった。

これには黒ウサギも驚く。てっきり好戦的なナナシなら、この三人とともに、無謀にも白夜叉に挑むと思っていたからだ。

「あら?ナナシ君はのらないの、負けるのが怖いのかしら?」

「どうした、ノリが悪いなナナシ。お前なら進んで白夜叉に挑戦すると思ってたが、見込み違いか?」

飛鳥と十六夜がナナシに挑発をする。しかし、挑発されたナナシは顔色一つ変えずにもう一度首を振るだけだ。
てっきり挑発にのると思い神妙な顔をする二人の鼻先に、ナナシはスマホの画面を押し付ける。

「これは？」

「デビル……アナライズ？これはまさか……」

突きつけられた画面には、こう表示されていた。

【魔王】　白夜叉Ｌｖ６８
弱点［氷結］・耐性［氷結・火炎・万能以外全て］
吸収［火炎］・無効［呪殺・破魔］
ＨＰ　???／???　ＭＰ　???／???
使用技　？

「これは、白夜叉のステータスなの？」

「ＲＰＧのステータス画面にそっくりだな、十中八九飛鳥の考えで正解だろう」

「ほぅ……。私の力を写し出す機械とは、何とも面妖なものよ。さて――」

そうして、白夜叉はカードを取り出す。

一瞬だった、白夜叉の自室にいたはずの三人の周りに、一面黄金色をした稲穂が広がっていた。

しかし景色は黄金色から変化していき、白い地平線から覗く丘に、森のなかに佇む湖畔に、まるで映像のように景色が次々と切り替わり、やがてある景色だ止まった。

それは、一面の雪景色だった。地平線では太陽が今にも沈もうとしているが、不思議なことにいつまでたっても沈まず、いつまでも地平線と水平に動き続ける。

先程からの景色の変化は幻でもトリックでも何でもなく、これは確固たる現実の事象だと思わせられる。

明らかに人智を超越し、そして世界そのものをねじ曲げる力を、目の前の他でもない白夜叉が使ってみせたのだ。

この余りにも異常な光景に、先程まで威勢よく白夜叉に挑もうとした三人は押し黙るしかなかった。

「――私の力を知った上で、どうする？お主らが望むのは、私がお主らを試してやる為の〝試練〟か？それとも、この私との対等で無謀な〝決闘〟か？選ぶが良い」

白夜叉はその幼い外見からは想像もつかないほどの壮絶で嗜虐的な笑みを浮かべ、さも愉快といった声音で十六夜達に挑発の意を含めて問いかける。

もはや三人には、白夜叉に勝とうという気概など持ち合わせていなかった。しかし、自分達から喧嘩を売っておいて逃げるのは、三人のプライドが許せない。

しばらくの間白夜叉と三人の間に沈黙が続く。息もつかせぬほどに緊迫した雰囲気の中、十六夜がおもむろに「へッ」と鼻をならす。

「まぁいいさ。ナナシが止めとけと言っているのに無視しちゃ可哀想だ。ナナシのためにも、ここは黙って〝試され〟といてやるよ」

そう言って、十六夜は肩をすくめてヤハハと笑って強がる。プライドの高い十六夜は最大限に譲歩して、『ナナシの面子のために』降りて

やるということで引き下がる。

「くっくく……して、そなたらもそやつと同じか？」

「……ええ、そうね。今回は試されてあげるわ」

「右に同じ」

「ふふふっ。そうかそうか」

意地を張る十六夜達に白夜叉は笑いながら問う。

「では、そちらのおんしはどうじゃ？私と決闘するかえ？」

「……」

白夜叉に決闘するかどうかナナシは問われるが、直ぐに首を振ってそのつもりはないと伝える。

そもそも勝てる確率が低すぎるし、三人はともかく自分は戦ったところで旨味がないのだ。わざわざ自分から骨を折りにいくつもりは、ナナシにはない。

「ははは、どうやらそなたも試されるのを選ぶらしいな。ならギフトゲームの内容を考えんとなぁ」

そう言って白夜叉は思案する素振りをナナシ達に見せる。

（くふふ……。ナナシといったか、なかなか面白い奴よのう）

しかし、提出するギフトゲームの内容自体は既に決まっている。今白夜叉が考える素振りをするのは、ナナシに対する評価を適切に下す

ために、すこし時間が欲しかったからだ。
というのも、白夜叉は先のたった数分だけの展開でナナシを気に入ってしまったのだ。

（唯一私の実力に気付けたから、というのもある。だが、それだけじゃない。奴の目は、他の三人とは全然違う輝きをしていた）

白夜叉が挑発紛いに〝決闘〟するかどうかを聞いたとき、最初に喧嘩を売った三人は皆一様に『勝てる確率など、万に一つもない』という目をしていた。
それもそうだ、あれだけ目の前で神性をさらけ出され、質の悪い脅しをされたのだ。そう考えたしまっても仕方ない。
だが。

（あやつは違った。『万に一つだけだが、光明はある』そんな目の輝きをしていた）

どちらも勝てる確率が低いということは同じだ。だが、根本的に意味が違う。
十六夜達は自分達との力の差に挫折した、だがナナシという少年は白夜叉の力量を知っていてなお、光明を捨ててはいないのだ。
まるでその瞳は狼を連想するほど鋭く、隙あらば刈り取るという気迫を発しているほどだ。

（ここまで自信いや、反骨心を持った瞳を見たのは初めてじゃのう。黒ウサギめ、なかなかいい人材を手に入れとるわい）

白夜叉は静かに心の中でほくそ笑み、ナナシという少年に少なくない程の期待を寄せるのだった。